

昭和62年度 発掘調査報告書

柏木遺跡

新田遺跡(後地区)

新田遺跡(西地区)

山王遺跡

昭和63年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

## 序

多賀城市は、広域仙台圏の中核的都市として、「文化のかおるうるおいのあるまち」を基本目標に長期的ビジョンにたったまちづくりを押し進めています。その一環として、新しい文化的創造と伝統の継承・発展を目指し、多賀城市文化センターが昭和62年4月に開館いたしました。同時に、この文化センターの中に埋蔵文化財調査センターが設置され、市内の遺跡の発掘調査や資料の収集・保存・公開、さらに文化財愛護精神の普及・啓発活動などを積極的に行うことになりました。

本報告書は、当センターが昭和62年度国庫補助事業として調査を実施した柏木遺跡、新田遺跡、山王遺跡の成果を概略的にまとめたものです。特に柏木遺跡では、約10万年前に遡るとみられる旧石器時代前・中期の石器が多量に発見され、また奈良時代に國府多賀城に鉄を供給していたと思われる製鉄造構が発見されました。後者では製鉄炉、木炭窯、鍛冶工房跡などの造構がセットとなって良好な保存状態で残されていました。この時期の製鉄遺跡は、東北地方ではわずかに福島県で発見例があるだけで、宮城県内では他に例をみません。さらに、國府多賀城に関連する官営的な性格を有していたとも考えられ、学術的にも大変貴重な遺跡であるといえます。

なお、柏木遺跡の発掘調査におきましては、文化庁、県文化財保護課、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所、東北福祉大学の芹沢長介先生、東北大学の須藤隆先生をはじめ考古学研究室の方々、多くの学生や地元のみなさんの御協力を得、特に本市文化財保護委員の鎌田俊昭氏には調査員として多大の御協力をいただきました。ここに関係者の皆様に対し厚く感謝申しあげるとともに、本報告書が広く教育の場や学術研究のために役立つことを願うものであります。

昭和63年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長名取恒郎

## 例　　言

- 本書は、昭和62年度の国庫補助事業として実施した柏木遺跡、新田遺跡（後地区）、新田遺跡（西地区）、山王遺跡の調査成果をまとめたものである。
- 本書の執筆・編集は、各調査の担当者が分担して下記のとおり行った。なお、柏木遺跡B地区の旧石器関係については、多賀城市文化財保護委員鎌田俊昭氏に御願いした。

I - 4(I) .....	鎌田俊昭	II .....	千葉孝弥
I - 1～3・4(II) .....	石川俊英 相沢清利	III・VI .....	石本 敏
- 柏木遺跡の石器観察は、鎌田俊昭、山田晃弘（東北歴史資料館）、山田しよう（東北大大学院）の協議のもとに、森嶋秀一（東北大大学院）が実測・トレースを行った。
- 炉材粘土の耐火度測定については、川鉄テクノリサーチ株式会社、総括技術室に依頼した。
- 石材の鑑定は、蟹沢聰氏（東北大）に依頼した。
- 本書の土色については、「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄：1976）を使用した。
- 調査、整理に関する諸記録および出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

## 調　　査　　体　　制

調査体制は次のとおりである。

○多賀城市教育委員会　社会教育課文化財保護係（宮城県多賀城市中央2丁目27番1号）

社会教育課長　名取恒郎　技師　滝口 卓

文化財保護係長　高倉敏明　主事　柏原靖史

○多賀城市埋蔵文化財調査センター（宮城県多賀城市中央2丁目27番1号）

所長　名取恒郎（兼務）　技師　石川俊英　千葉孝弥　石本 敏　相沢清利

主査　高倉敏明（　）　嘱託　鈴木久夫　滝川ちかこ

## 調　　査　　要　　項

### <柏木遺跡>

- 遺跡所在地：宮城県多賀城市大代5丁目1番1号他
- 調査期間：昭和62年8月17日～昭和63年3月31日
- 調査面積：4,000m<sup>2</sup>（対象面積12,000m<sup>2</sup>）

4. 調査員：鎌田俊昭、藤村新一、横山裕平（石器文化談話会） 山田しょう、森嶋秀一、桜井美枝（東北大大学院）
5. 調査参加者：菊池豊、熊谷信一、芳賀英実 横地剛、加藤勝仁、風間栄一、辻史郎、飯坂正弘、西山伸一（早稲田大学）、木村有紀、亀田直美（早稲田大学大学院）、下平博行、伊藤慎二（国学院大学）、野中修二、栗原伸好、酒井直樹（帝京大学）、新野一浩、千田祐美恵（東北福祉大学） 他、多賀城市大代、笠神地区、七ヶ浜町のみなさん72名
6. 遺物整理：佐藤悦子、柏倉霧代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子
7. 調査協力：文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、仙台市教育委員会文化財課、東北大大学文学部考古学研究室、石器文化談話会、大和団地株式会社、丸信建設株式会社
8. 発掘調査から報告書作成まで下記の諸氏、諸機関から御教示、御協力いただいた。  
芹沢長介（東北福祉大学教授）、須藤隆（東北大大学文学部助教授）、中川久夫（東北大大学理学部教授）、増崎彰一（名古屋大学教授）、岡田廣吉（東北大大学助教授）、小林達雄（国学院大学教授）、木村英明（札幌大学教授）、柳田俊雄（郡山女子短大助教授）、山田一郎（東北大大学農学部）、松村恵司、佐藤信（文化庁）、葉賀七三男（日本産業技術史学会）、志村宗昭（金属材料研究室）、穴澤義功、大澤正己（たたら研究会）、石田琢二（仙台二高）、佐瀬隆（盛岡四高）、輔田勝彦（古川工業）、渡辺泰伸（仙台育英学園）、進藤秋輝、加藤道男、斎藤吉弘、佐藤則之、千葉保、柳沢和明（宮城県教育庁文化財保護課）、桑原滋郎、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、丹羽茂、後藤秀一（宮城県多賀城跡調査研究所）、藤沼邦彦、村山敏夫、小井川和夫、佐々木常人、吉沢幹夫、笠原信男（東北歴史資料館）、田中則和、佐々木和博（仙台市博物館）、加藤玲（山形県立博物館）、藤原紀敏（福島県立博物館）、金森安孝、平間亮輔、佐藤淳（仙台市文化財課）、寺島文隆、安田稔、飯村均、吉田秀享、新堀昭宏（福島県文化センター）、萩原恭一、小林信一（千葉県埋文センター）、館野孝、新井真博（東京都埋文センター）、高橋一夫（埼玉県埋文事業団）、間清（富山県埋文センター）、梶原洋、会田容弘、佐久間光平、仙波伸久（東北大大学考古学研究室）、長崎潤一、橋本博文（早稲田大学文化財調査室）、窪田藏郎

A・P ディレピヤンコ、R・S ワシリエフスキイ（ソビエト科学アカデミー）（順不同）  
<新田遺跡、山王遺跡>

1. 調査協力：熊谷春男、柳原胞三、熊谷俊雄（地権者）（和太仲興業、南城不動産商事）
2. 調査参加者：赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、井川温子、遠藤一代、大山貞子、加藤文一、黒崎庸治、熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤はつみ、桜井栄子、佐々木四郎、佐藤一子、千葉享一、角田静子、渡辺園恵

# 本文目次

## 序 文

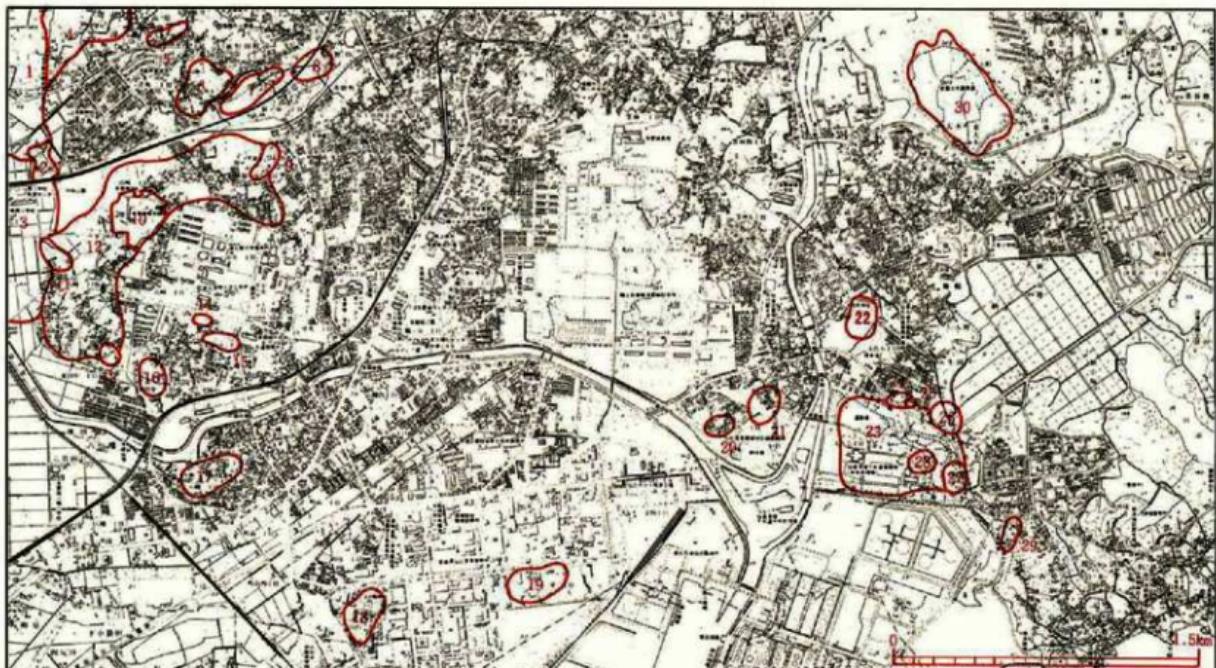
## 例 言

## 調査体制

## 調査要項

### I . 柏木遺跡

1 . 柏木遺跡の立地と環境	2
2 . 調査に至る経緯	2
3 . 調査方法と経過	4
4 . 調査成果	6
(I) B 地区	6
<B 地区の地形と地質>	6
<出土層位と出土状況>	9
<7 層上面の主な石器>	9
<7 層上面石器群の小括>	13
(1) 各石器集中地点のまとめ	12
(2) 7 層上面石器群の位置づけ	13
<成果と今後の課題>	13
(II) A 地区	17
(1) 製鉄炉	17
(2) 木炭窯	23
(3) 壁穴住居跡	30
(4) 土塙	32
(5) 特殊遺構	34
<発見遺物>	35
<まとめ>	36
炉材粘土他耐火度測定報告	41
写真図版	43
II . 新田遺跡（後地区）	56
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査成果 4. まとめ	
III . 新田遺跡（西地区）	60
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査経過 4. 調査成果 5. まとめ	
IV . 山王遺跡	64
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査経過 4. 調査成果 5. まとめ	
写真図版	67



遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	神列史跡多賀城跡	國府跡	奈良・平安・中世	11	丸山區古墳群	高塚古墳(円)	古	21	元井場遺跡	散地	平安
2	鉢削遺跡	官衛跡	平安・中世	12	高崎遺跡	高崎古墳群	平安・中世	22	柏木遺跡	散地	古文・平安
3	市川塙遺跡	馬落跡	奈良・平安	13	東田中塙前遺跡	敷石高地・竪路	奈良・平安・中世	23	大代遺跡	含括地	安
4	西武遺跡	散布地	*	14	鴨荷殿古墳群	高塚古墳(円)	古	24	大代横穴古墳群	穴古墳	後
5	高原遺跡	*	*	15	桜井弁鏡群	竪路	中世	25	大代洞窟遺跡	横洞窟	古
6	小沢遺跡	散布地	*	16	志引遺跡	包含地・竪路	昭和・奈良～中世	26	樺本貝塚	貝塚	生
7	野田蛇跡	散布地・竪路	奈良・平安・中世	17	八幡鏡群	散布地・竪路	奈良・平安・中世	27	伊形遺跡	貝塚	文
8	矢作ヶ谷遺跡	*	*	18	八幡仲鏡群	散	奈良・平安	28	新田前遺跡	馬場	生
9	留ヶ谷遺跡	*	*	19	東原遺跡	奉地	奈良・平安	29	御所横穴古墳群	馬場	真
10	神列史跡多賀城跡	寺院跡	奈良・平安	20	西原遺跡	*	*	30	国史跡大本園貝塚	馬場	古

図1 多賀城市遺跡分布図(東部)

# I 柏木遺跡

## 1. 柏木遺跡の立地と環境

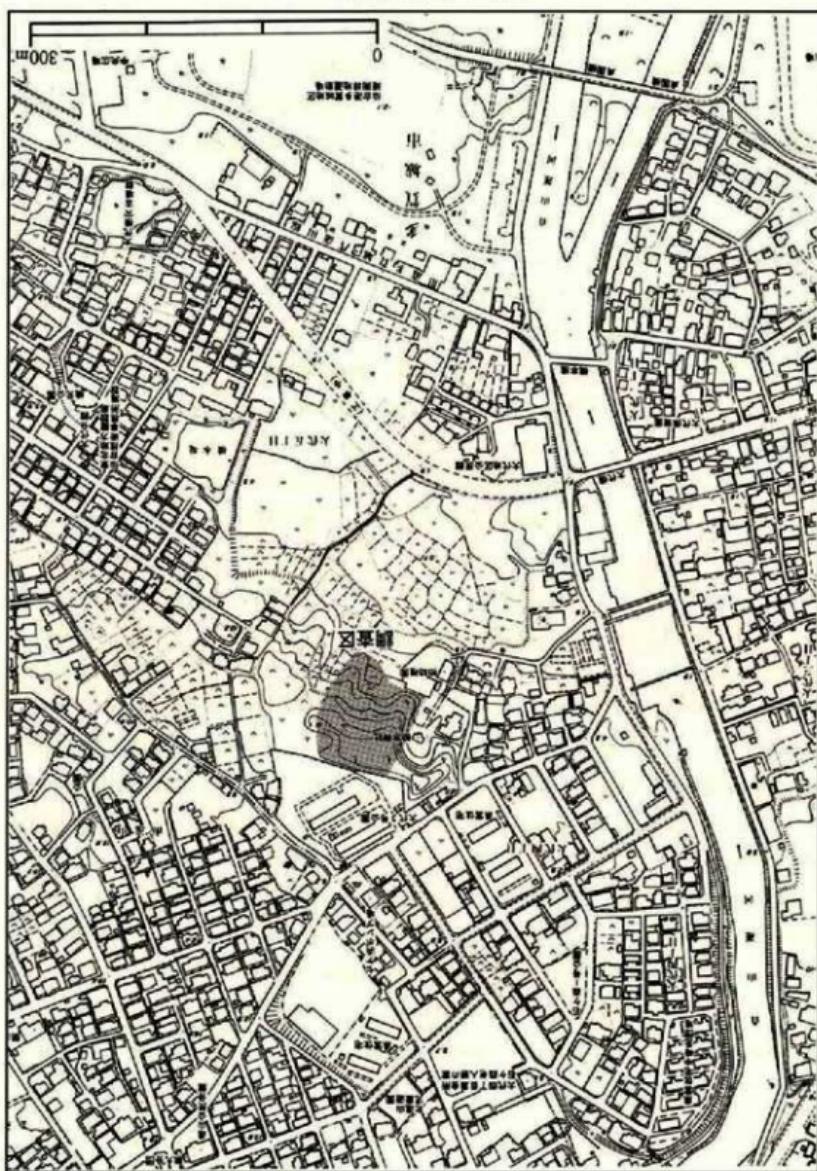
柏木遺跡は、多賀城市大代5丁目に所在する。本遺跡が立地している丘陵は、松島丘陵より派生してきた小起伏状低丘陵であり、新第三紀に形成された砂岩、及び凝灰岩質砂岩によって形成されている。

本遺跡の周辺には、各時代にわたり多くの遺跡が所在している。主なものをあげれば、縄文時代では、大木式の様式遺跡である国指定史跡大木圓貝塚、他に左道貝塚、鬼ノ神貝塚などが知られている。弥生時代のものでは、「櫛痕のある土器」で著名な樹形圓貝塚がある。古墳時代のものでは、本遺跡の立地する丘陵の斜面を利用して、大代横穴古墳群、樹形横穴古墳群、砂山横穴古墳群、薬師横穴古墳群などの多くの横穴古墳が造営されている。さらに奈良・平安時代には、本遺跡の南側に広がる沖積地に、東原遺跡、西原遺跡、元舟場遺跡、大代遺跡が所在しているが、発掘調査がほとんど実施されていないことや、遺跡が埋滅するなどして、その所在、内容については不明なものが多い。以上のように本遺跡の周辺は古くから人間が居住する生活環境に適していたものと思われる。

## 2. 調査に至る経緯

本調査については、昭和61年4月に本遺跡を含む周辺の宅地造成工事が大和団地株式会社より提示されたため、本件開発計画について協議を行った。当該地については、昭和54年度の分布調査による土器片と鉄滓が若干採集されていただけで、遺跡の性格や範囲が全く不明であったため、昭和61年5月に再び現地踏査を行った。その結果、丘陵斜面部の10ヶ所の地点で土師器、須恵器、鉄滓を採集することができ製鉄に関連する遺構の存在が予想された。この成果をもとに対象となった開発区域は約4万m<sup>2</sup>と広大な面積であるため、沖積地、丘陵地に分けて試掘調査を実施することになった。沖積地は、同年8月に行なったが縄文土器、炉壁片が若干出土しただけで製鉄に関連する遺構は検出できなかった。そこで、沖積地と丘陵部を工区分けして、丘陵部については、発掘調査を実施することで了承を得た。丘陵部の試掘調査は、昭和62年6月に行なったが製鉄炉、木炭窯を発見した。製鉄に関連する遺構、遺物が顕著に認められたため、申請者と再度協議を行い、本調査について全面的な協力が得られた。よって昭和62年8月17日より調査を実施した。

第1图 滨海区位置图



### 3. 調査方法と経過

今回の発掘調査は、昭和62年6月に行った試掘調査の成果をもとに丘陵斜面部約2500m<sup>2</sup>を対象とした。発掘基準線は、国家座標の方位をとっており、東西基準線IV-01と南北基準線D-aの交点は、X:-198,600.000、Y:+18,300.000である。この基準線をもとに、開発対象区域内を一辺3mのグリッドで区画した。各グリッドの呼称は第11図のとおりである。

本調査は、8月17日より開始した。はじめに重機・人手による表土剥ぎを行った後（9月20日）、東側丘陵斜面部の透構検出作業に入り1・2号木炭窯を発見する。検出時には、尾根に直交する3本の溝状プランが窯本体と見られたが、掘り進めるうちに、これらは2基の本炭窯に取り付く作業場であることが判明した。また、これとほぼ並行して製鉄炉が存在する上段の平場の透構検出も行い炉本体、付属施設等を確認する。炉本体・作業場は直接重複関係はないが、廃津場の鉄津場の関係により中央の3号炉が一番新しいことが知られた。

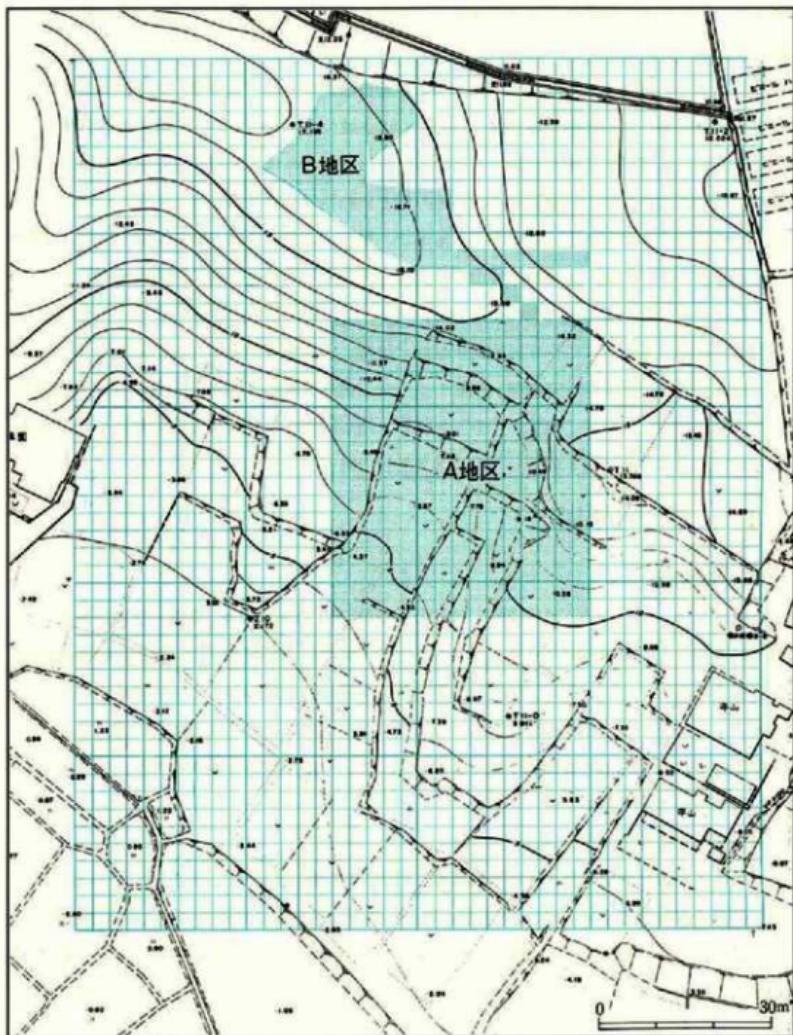
また、前後するが9月中旬頃には、丘陵頂部平坦面のL字形試掘トレンチの再調査を石器文化談話会の協力により実施し、3層上面・5層上面から1点ずつ、さらに7層上面から10点の旧石器を発見した。この調査成果によりこの地区的発掘調査の必要性が高まった。そこで当埋文センターでは申請者と協議を行い、急掘旧石器時代の調査を組み入れることとした。そして、これまで調査を行っていた斜面部をA地区、平坦部をB地区と呼ぶことにした。

B地区的調査は、1500m<sup>2</sup>を対象とし、その内約750m<sup>2</sup>を調査した。10月1日より重機・人手による表土剥ぎを開始し、10月12日より2・3層の精査と基準杭・地区杭の設定をした。順次4・5・6層と調査を進めいくつか石器が発見された。10月24日にいたって、BⅠ区の北東方向から入る谷頭付近で、それを抜むように数十点の石器が7層上面から出土した。そこで、BⅠ・BⅡ・CⅠ・CⅡの7層上面を精査した結果、BⅠ・CⅠ区を中心に186点の石器が5ヶ所のまとまりをもって発見された。この内、第5石器集中地点などの23点の石器を脂肪酸分析用に採取した（11月11日～16日）。また、第1・5石器集中地点を中心に残留磁化測定用の土壤を採取し（12月10日～16日）、他に土壤分析、プラントオバール用の土壤も採取した。最後に、7層上面の等高線図、各セクション図、谷地形図を作成し、補足調査を行い12月19日にB地区的調査を終了した。

一方、A地区的調査はB地区と並行して行い10月20日より3～5・6号木炭窯の調査を開始した。3～5号木炭窯も付属施設をもち1・2号木炭窯とほぼ同様の構造をもっていることが判明した。1・6号木炭窯の調査が終了したのは11月25日である。製鉄関連透構はこの間も継続して調査しており、各炉の作業場、廃津場に幅30cmの縦横断サブトレンチを入れ、鉄津の堆積状況を確認する。また、1号炉本体の調査では半地下式豊型炉と呼ばれる構造を呈し

ていることが判明し、炉背に送風施設を伴っていることも確認した。

12月中旬頃からは下段平場の調査にも入った。この平場からは竪穴住居跡3軒、土塁3基、特殊造構4基が検出された。SI 02・03竪穴住居跡、S X 04特殊造構は、西側に隣接して構築されており、鍛冶炉、鍛造剥片が検出されたことから鍛冶工房跡と判明した。



第2図 調査区全体図

これまでの調査で、本製鉄遺構は、奈良時代に属し、多賀城跡との関連性を強くもつ本格的な鉄生産遺構であることがわかり、古代東北地方の歴史上極めて重要な遺構であることが指摘されるようになった。12月2日は県教育委員会文化財保護課、12月14日には文化庁記念物課松村文部技官の現地視察があり、調査方法、調査期間の延長、遺構の保存等について話し合いを行った。その結果、調査は1月以降継続して実施し、調査費用は国庫補助事業の経費を投入することになった。

昭和63年度の調査は1月7日より開始した。1号製鉄炉作業場・廃滓場、3号製鉄炉本体、2号製鉄炉廃滓場、SI04竪穴住居跡、SK02・03土塙、SD03(A・B)溝跡の調査を引き続行う。1号製鉄炉作業場を完掘したところ、その東壁ぎわに4号製鉄炉を検出した。4号製鉄炉は半地下式堅型炉の形態をとるが、他の炉と比較して小型であった。また、SK02・03土塙については、不整形の土塙が集まつたもので、掘り込んでいる基本層の土壤から粘土探掘塙と考えられた。この頃には本遺跡の遺構の全容が明らかになり、製鉄に関連する施設がコンパクトにまとまっていることが判明した(2月中旬)。2・3号製鉄炉本体についても半地下式堅型炉とわかり、基本的に1~3号製鉄炉は同じ炉型、付属施設で構成されていることが知られた。最後に各炉の平面図、立面図、横断セクション図を作成し、製鉄炉についての調査は終了した(3月中旬)。この後、遺構の全景写真撮影、地形図作成、整地層の範囲確認などの補足調査を行い、すべての調査を終了したのは3月31日である。

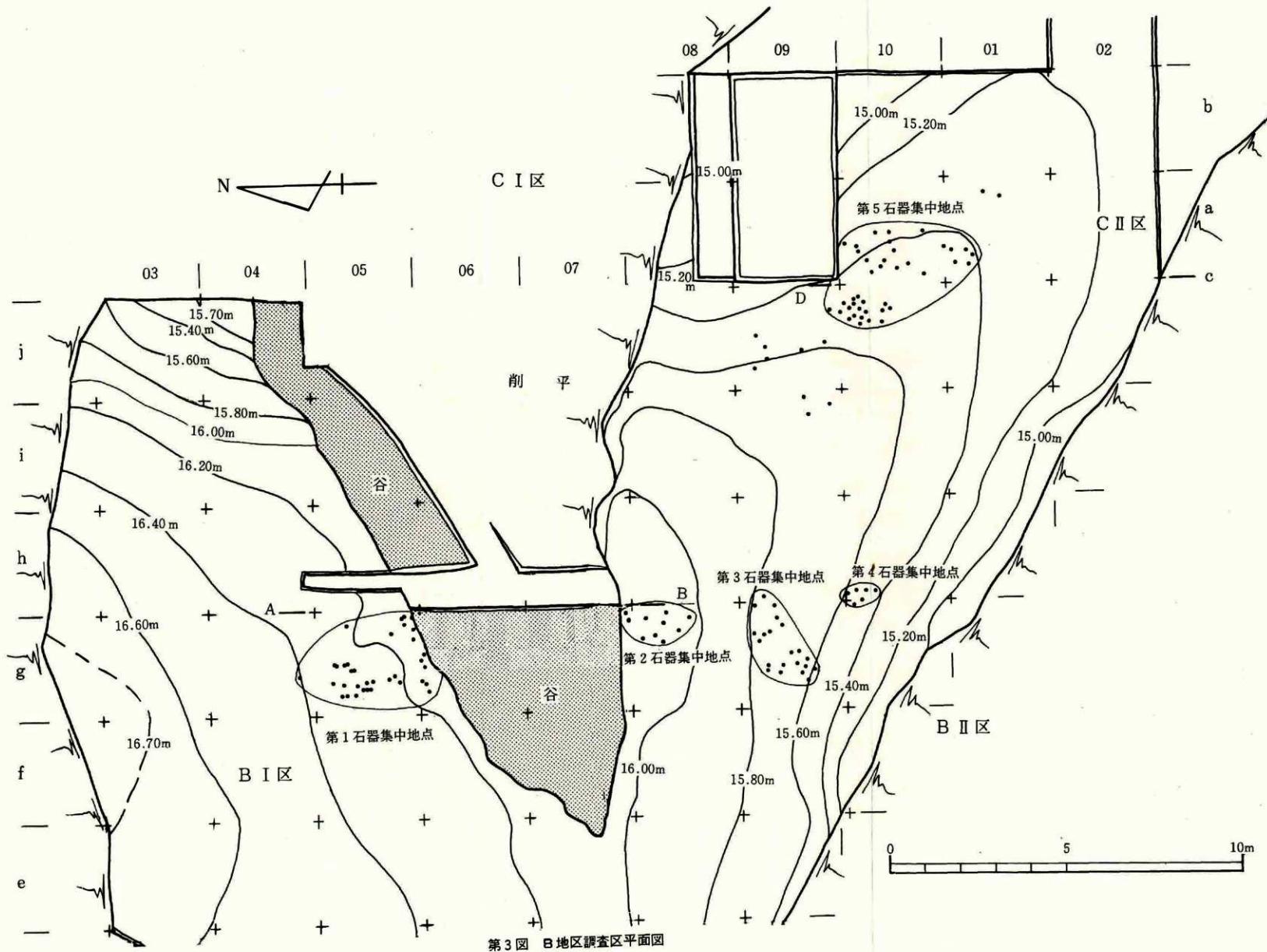
## 4. 調査成果

### (I) B地区

B地区では、旧石器時代前・中期、後期の石器群、縄文時代晩期の遺構・遺物、奈良・平安時代の遺物などが発見されている。しかし、これらについて整理途中で、考古学的な検討も十分に行なわれていない。また、地形・地質学的にも残された問題があり、脂肪酸分析、プラントオバール分析、残留磁化測定、熱ルミネッセンス法、電子スピン共鳴法年代測定などについて分析途中、あるいは分析依頼予定である。そこで、今回は紙面の制約もあり、B地区最下層の7層上面について簡単に記したい。

#### < B地区の地形と地質 >

多賀城市周辺の地形細部と更新世堆積層については不明な点が多い。大ざっぱに三疊紀、中新世、鮮新世基盤の標高50~100mの塩釜丘陵が、塩釜・利府から南西方向に大きく張り出し、その張り出し周辺に標高20m前後~50mの平坦な丘陵が貼りつき、仙台平野に至る(北村ほか1986)。柏木遺跡B地区(以下B地区)はこのような丘陵の東端付近に立地し、現海岸線から約2kmの所に位置している。



第3図 B地区調査区平面図

B 地区が立地する丘陵の平坦部は標高15~17mである。北側には北東方向から谷が入るが、全体になだらかで、七ヶ浜町遠山の丘陵に向って再び高くなっている。これに対し、南側では急激に傾斜して沖積面に至る。

先に、柏木遺跡の西方約3.5kmの志引遺跡が立地する丘陵の平坦化を下末吉海進期と考えた（鎌田 1984）。これに対して柏木遺跡の平坦化は下末吉海進期、あるいはそれ以前であろうという考え方もある。いずれにせよ、両遺跡が立地している丘陵は大体同じ標高であり、鮮新世基盤の凝灰岩上に堆積している更新世堆積層は似た状況にあるので、これらはほぼ同時期に平坦化したと考えられる。

柏木・志引遺跡周辺のこのような丘陵上には数十cm~1mの更新世の地層が堆積している。大ざっぱに、表土、褐色土、明褐色火山灰、赤褐色粘質土の順となっている。志引遺跡の調査や周辺の踏査によって、明褐色火山灰は旧石器時代後・晩期に、赤褐色粘質土は旧石器時代前・中期に形成されたものと考えられている（山田 1984、鎌田 1984）。

B 地区の基本層序は第4図に記してある。3層が明褐色火山灰に、4層以下が赤褐色粘質土に相当し、7層は鮮新世凝灰岩の風化した層で志引遺跡9層と酷似する。そして、北東方向から入る谷の谷頭付近では少なくとも2回以上の侵蝕が認められた。最も新しい埋土①~③層は4層を侵食しており、谷頭が完全に埋没した後に3層が部分的に堆積している。谷埋土④層以下は古い谷の埋土で、埋土⑧層は基盤の凝灰岩に直接堆積している。

#### ＜出土層位と出土状況＞

B 地区では、縄文時代晩期の遺物は主に2層から出土し、旧石器時代の遺物は3層中、5層中、7層上面、谷埋土上部から発見された。石器がまとまりをもち、明確に生活面が認定できたのは7層上面においてである。

7層上面では、北東方向から入る谷の北側に1ヶ所、南側で東にのびる尾根上に4ヶ所の石器集中地点が発見された。ここでの石器集中地点は便宜的に見た目でとらえたもので、それらの中には1~2mの小さなまとまりをもつものもある。

なお、7層は基盤の凝灰岩が風化した層で、それを覆う6層との堆積関係から7層上面出土の石器群相互に層位的な違いは認められない。

#### ＜7層上面の主な石器＞

7層上面では、計126点の石器が発見されたが、ここでは先述した諸事情により主な石器に限って簡単な説明に留め、層性表などは後日掲載する。なお、石材の鑑定は蟹沢聰氏によるが、暫定的な観察であり、今後の分析によって変更もありうることである。

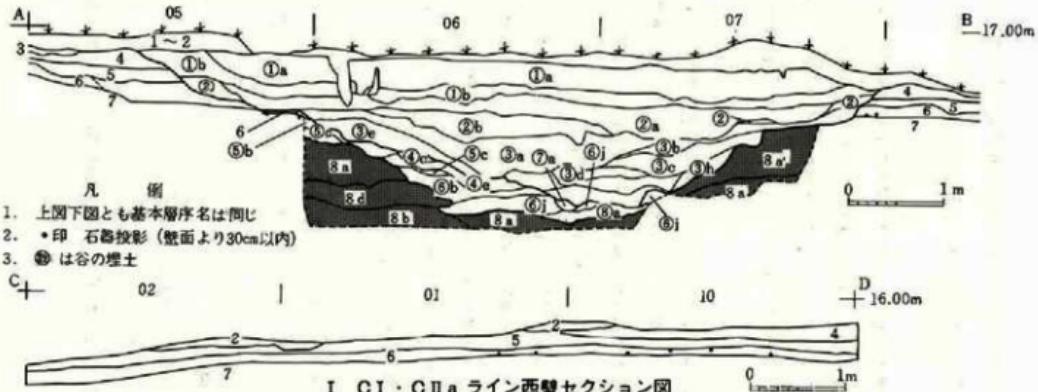
#### 第1石器集中地点（第5図） 石器34点

2、6、7はスクレイパーである。2は両面とも焼けハジケがあり、熱ルミネッセンス法・

B地区基本層序

+	+	+
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		

BI-hライン東壁セクション図



## 凡例

- 上図下図とも基本層序名は同じ
- \*印 石巻投影(盤面より30cm以内)
- ◎は谷の埋土

C+

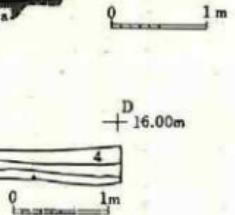
02

01

10

+ 16.00m

I CI-CIIa ライン西壁セクション図



B地区基本層序観察表

層序	層厚cm	土色	土性	粘性	硬度	含有物	備考
1	10	10YR 5/8赤褐色	シルト	弱	軟	腐食多量	表土
2	10-20	10YR 5/8黄褐色	砂質シルト	無	硬	#20mm以下の褐色風化 灰岩片を少量含む	
3	5-20	10YR 5/8明赤褐色	*	*	*	*	火山灰
4	10-25	5YR 5/8赤褐色	シルト	弱	やや硬		赤色風化
5	10-25	*	*	*	*	#10mm以下の褐色風化 灰岩片を少量含む	
6	10-30	5YR 5/8明赤褐色	*	中	中	#40mm以下の褐色風化 灰岩片を多量(50%)に含む	
7	5-10	7.5Y 5/8明赤褐色	粘土質シルト	弱	やや硬	#50mm以下の灰白色風化 灰岩片を多量(70%)に含む	8層の風化带
8		2.5Y 5/8灰白色	*	*	硬		基盤灰岩

CI-hライン東壁谷埋土観察表

層序	層厚cm	土色	土性	粘性	硬度	含有物	備考
①	40-60	7.5Y R 5/8明褐色	シルト	弱	硬	#10mm以下の褐色、灰 白の風化灰岩片を多量に含む	3層以前、 4. 墓以後
②	10-50	7.5Y R 5/8明褐色	*	*	やや軟	#20mm以下褐色、灰白の風 化灰岩片多量、マンガン斑	細かい表面 起伏
③	20-50	10Y R 5/8明褐色	*	*	*	*	*
④	15-30	10Y R 5/8明褐色	砂質シルト	弱	やや硬	#20mm以下の褐色、灰 白の風化灰岩片を多量に含む	
⑤	20-30	2.5Y R 5/8明褐色	シルト	*	*	#20mm以下の褐色、灰 白の風化灰岩片を多量に含む	特に赤鉄強い
⑥	10-40	2.5Y R 5/8明褐色	*	弱-少	*	#20mm以下の褐色、灰 白の風化灰岩片を多量に含む	
⑦	10-30	10Y R 5/8明褐色	粘土質シルト	弱	*	#30mm以下の褐色、白 の風化灰岩片を多量に含む	
⑧	10-40	10Y R 5/8明褐色	*	*	硬	#40mm以下の褐色、白 の風化灰岩片を多量に含む	古い 谷埋土

第4図 柏木通跡B地区セクション図

電子スピン共鳴法による年代測定を依頼する予定である。6、7はいずれも石核を素材としている。

14は石核かもしれないが、図下端は平坦に整形してあり、図上端の刃部には微細剝離痕が認められショッピング・トゥールとした。

9は鋸歯縁石器で、図の右側縁と裏面に両極剝離痕があり、整形と考えられる。

8、10、11、12、13は石核で、8、10は多面体形、11は基本的に円盤形である。11、12は剝片剝離後に二次加工が施されている。

3、4、5は二次加工ある剝片、1は微細剝離痕ある剝片である。

2、4、6、7、9、13、14は玉髓、3、5、11、12は珪質頁岩（註）、1、8は珪化凝灰岩で、いずれも緻密・ハリ質である。10は変質安山岩または石英安山岩で、粒子がやや粗い。

他に、石核が5点、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片などが15点出土し、玉髓が非常に多い。

#### 第2石器集中地点（第6図1～6） 石器10点

1は石核（？）素材の二次加工ある剝片である。

2～6は石核で、3、5、6は多方向からの剝片剝離痕をもち、6は円盤形を呈する。2は上下の平坦打面から同一方向に数枚の剝片を剝離する。4は剝片素材で、基本的に直交する剝片剝離痕をもつ。

4、6は玉髓、1、5は碧玉、3は珪化木、2は珪質頁岩である。

他に、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片など4点があり、玉髓、碧玉、珪質頁岩などがある。

#### 第3石器集中地点（第6図7～14） 石器21点

7は二次加工ある剝片、8は石錐である。10は彫刻刀石器？、12は両極剝離痕ある石器で、これ自体石核かもしれない。

13は多方向からの剝片離痕をもち、円盤形石核である。14は上下両端に打面を固定して、それぞれ同一方向に剝片を剝離し、その後打面以外に二次加工を施している。

9は微細剝離痕ある剝片、11は剝片である。

7、8、10、11は玉髓、9は珪化凝灰岩、12は碧玉、13は流紋岩（珪化）、14は珪質頁岩である。

他に、彫刻刀形石器又は石錐が1点、両極剝離痕ある剝片が1点、微細剝離痕ある剝片・剝片が11点ある。玉髓が最も多く、次いで珪質頁岩、碧玉、珪化凝灰岩となる。

#### 第4石器集中地点（第7図1・2） 石器6点

1は先端が尖頭状を呈するスクレイパーで、珪質頁岩であり、2はスクレイパーで、黒色頁岩である。

他に、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片が4点あるが、玉髓・碧玉は1点もない。

#### 第5石器集中地点（第7図3～10） 石器41点

第5石器集中地点のC I・C II-aライン以東の23点は脂肪酸分析を依頼中で、石器に関して一切不明である。

3は石錐で、先端が磨耗している。

4は両面加工石器で折れており、ヘラ状石器の基部と考えられる。

5はスクレイパー、6～10は二次加工ある剝片で、6は半両面加工であり、9は最大厚1.3cmと部厚い。

3は玉髓、4は珪化凝灰岩、5、7、8～10は珪質頁岩、6は流紋岩である。

他に、石核が2点、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片などが9点出土し、玉髓・碧玉が多く、珪質頁岩・流紋岩などがある。

これらの石器集中地点の他に、第5石器集中地点の北西部で9点、南東部で2点発見されているが、後者は脂肪酸分析中のため不明である。

前者の内、第7図11は微細剝離痕ある剝片、12、13は二次加工ある剝片で、13の先端付近に急角度の二次加工が施されている。他に二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片などがある。11はかなり珪化した凝灰岩質頁岩、12は珪質頁岩、13は珪化凝灰岩であり、他に玉髓1点だけ認められる。

#### <7層上面石器群の小括>

##### (1) 各石器集中地点のまとめ

第1石器集中地点では、玉髓が半数以上を占める。石核が多く、スクレイパー、チョッピング・トゥール、鋸歯縁石器などがあり、大きさにはばらつきがある。

第2石器集中地点では玉髓と珪質頁岩が相半ばする。石核が多いが、定型的石器は少なく、やはり大きさにはばらつきがある。

第3石器集中地点では玉髓が最も多く、珪質頁岩も数点見られる。各種の石核、石錐、彫刻刀形石器？、両極剝離痕ある石器などがある。

第4石器集中地点では珪質頁岩、黒色頁岩などの石材で、玉髓は1点もない。尖頭状のスクレイパー、スクレイパー、二次加工ある剝片などがあり、いずれも3～5.5cmとやや大形である。

第5石器集中地点は最も広範囲で、出土点数も多い。脂肪酸分析用の石器を除外すると、玉髓と珪質頁岩が過半数を占める。石錐、ヘラ状石器？、スクレイパー、二次加工ある剝片、石核などがある。

この他、第5石器集中地点北西部の石器群は、珪質頁岩が多く、玉髓は1点だけである。

以上のように、層位的には同一層理面から出土しているながらも、それぞれの石器集中地点の

あり方にちがいが認められる。

## (2) 7層上面石器群の位置づけ

石材については、玉髓が第4石器集中地点を除いて各石器集中地点に認められる。第1・2・3石器集中地点では玉髓が半数以上を占め、第5石器集中地点では玉髓と珪質頁岩を合わせて半数以上となる。

石器の種類として、いわゆる定型的な石器が少ない反面、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片が多い。また、第1・2石器集中地点には各種の石核が多く、これまで座敷乱木遺跡(石器文化談話会 1983)、志引遺跡(多賀城市 1984)、馬場壇A遺跡(東北歴史資料館など 1986)で想定された剝片剝離技術のすべてをそろえているようである。この他、柏木7層上面には平坦な両設打面からそれぞれ同一方向に数枚の剝片を剝離した石核も見られる(第5図11、第6図2・5)。今のところ、石材の大部分は緻密・ハリ質であるためか、石材による石器製作技術のちがいは認められない。

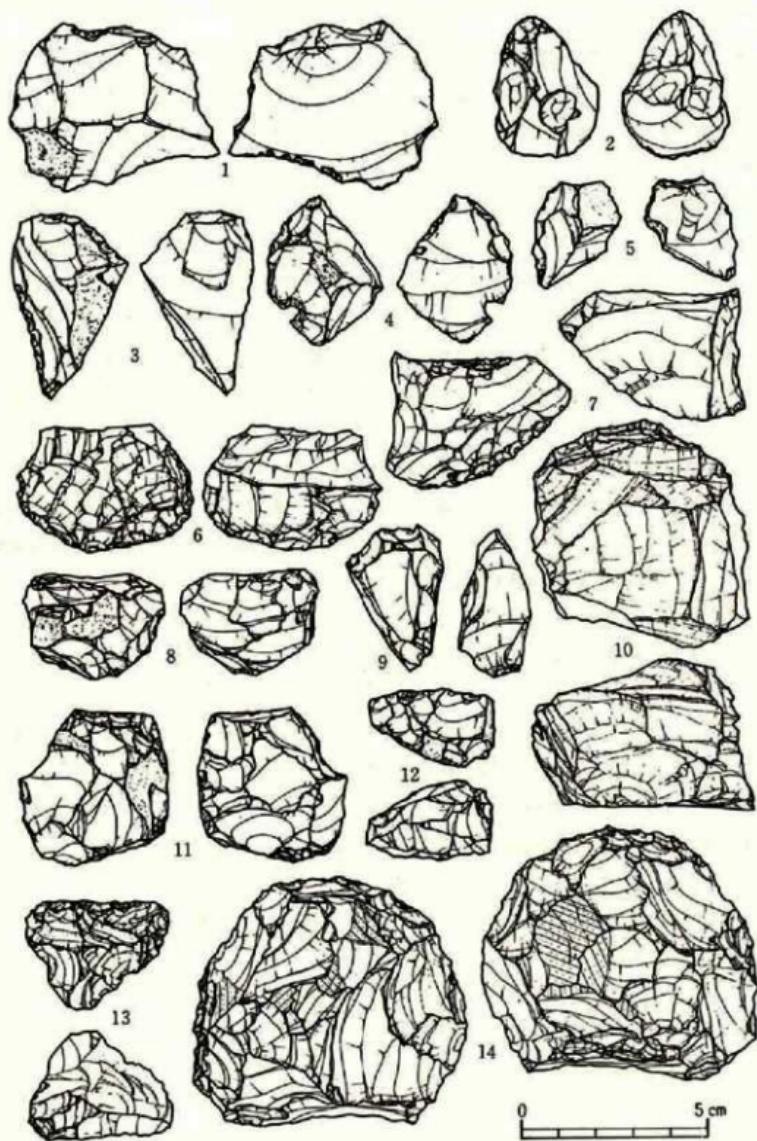
今日、宮城県の旧石器時代前・中期石器群は、江合川流域の層位的な出土例を軸としてA群→B群→C群という変遷が考えられる(鎌田 1987)。この変遷において、それぞれの石器組成の完全な全体像は必ずしもつかめていないが、柏木7層上面石器群は、石材・石器製作技術を概観してみると、A群・B群双方に共通する点がいくつかある。

## <成果と今後の課題>

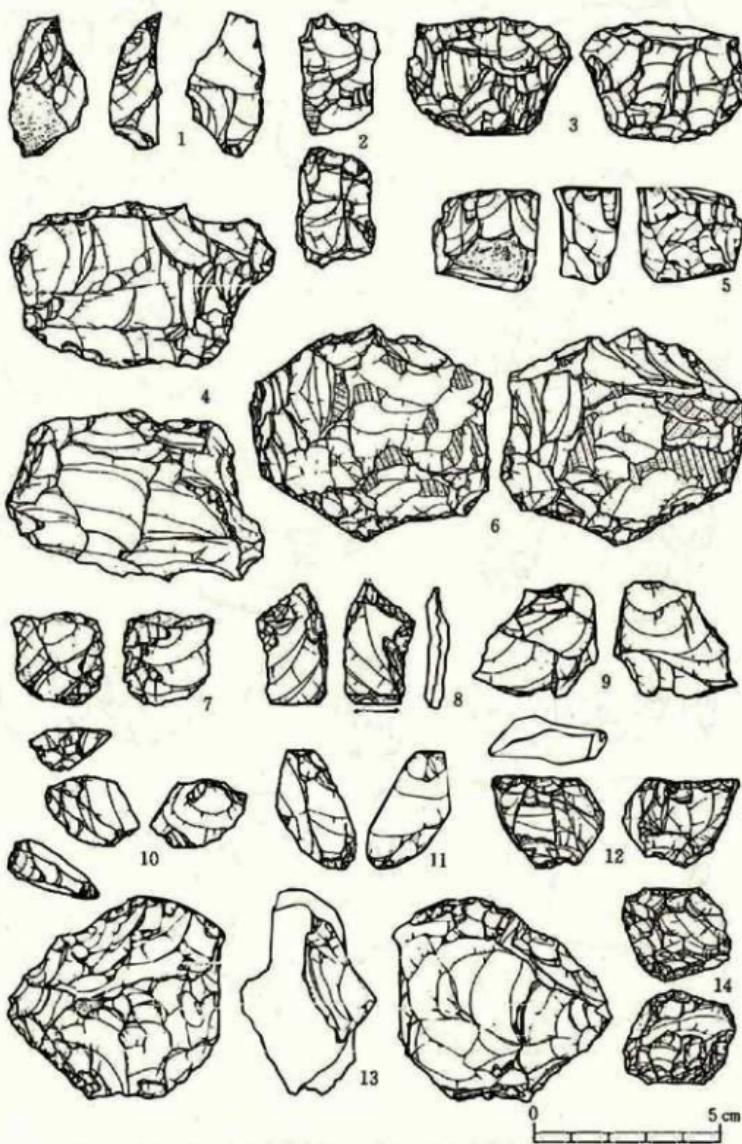
1. 柏木遺跡B地区では、旧石器時代前・中期として最大規模の約750m<sup>2</sup>の範囲が調査された。
2. その結果、7層上面では北東方向から入る谷の北側に1ヶ所、南側で東へのびる尾根上に4ヶ所の石器集中地点が発見され、この他を含めて計126点の石器が出土した。
3. 旧石器時代前・中期で初めて、地形全体における石器の残され方が明確に表わされた。
4. 加えて、隣接する関連諸科学の分析・測定の結果によって、B地区7層上面における生活の実態が復原される見通しを得た。
5. 種々の考古学的分析と周辺遺跡との関連を検討して、各石器集中地点相互の関係、編年的位置づけを明らかにせねばならない。

## 註

ここで書く“珪質頁岩”の中には、山形県寒河江市周辺で見られる表面が灰色のものとは異質な鉄分を含んだ赤褐色のものもある。

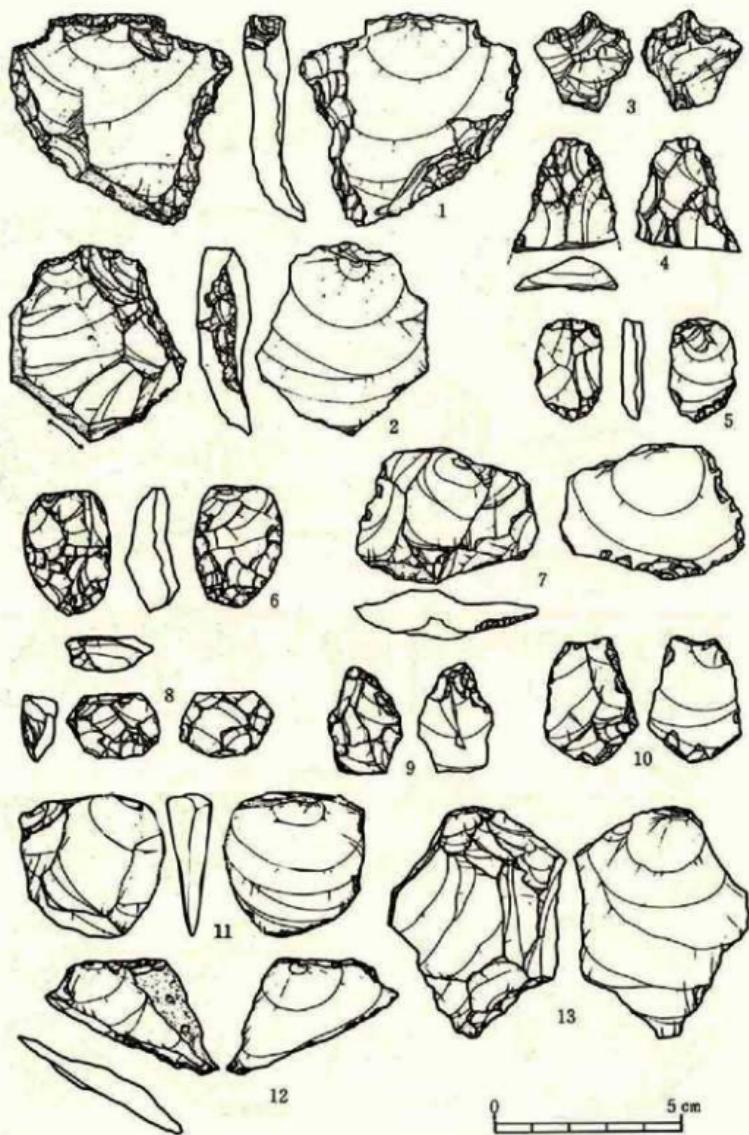


第5図 柏木遺跡B地区第1石器集中地点出土石器



第6図 柏木遺跡B地区第2・3石器集中地点出土石器

(1~6 第2石器集中地点、7~14 第3石器集中地点)



第7図 柏木遺跡B地区第4・5石器集中地点、その他出土石器  
(1.2 第4石器集中地点、3~10 第5石器集中地点、11~13 その他)

## (II) A 地区

### (1) 製鉄炉

製鉄炉は4基検出している。4基の炉の位置関係は西から順に1号、3号、2号と直線的に配置しており、4号は1号と3号の間に位置している。炉の切り合い関係は、1・2号を3号が切っており、炉の中では最も新しい時期にあたる。1・2号は切り合い関係をもっておらず、新旧は不明である。また、4号は1号によって切られており最も古い時期にあたる。炉の北側は部分的に整地を行ない、テラス状の平場を造り、付属施設を設けている。炉の南側は作業場から廃滓場へと続いている。

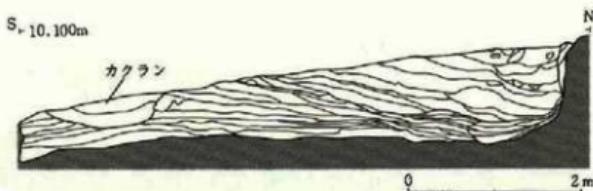
#### 1号製鉄炉

【構造】円筒形の半地下式堅型炉と呼ばれている形態である。炉前（南側）は、壊されており、全体の形状はとどめていない。内径70cm×70cm（推定）、深さは1.05mを計る。炉壁は、炉背東側上端にわずかに残存しているのみで、他は上半が掘り方埋土、下半は岩盤が露出している。炉背上端は浅い窪みとなっており長さ60cmの板状礫が横位に据えられている。炉内堆積土中からは、多量の大小礫が南側から流れ込んだ状況で出土している。この礫の中には、直接火を受けたものや鐵滓が付着しているものが見られる。

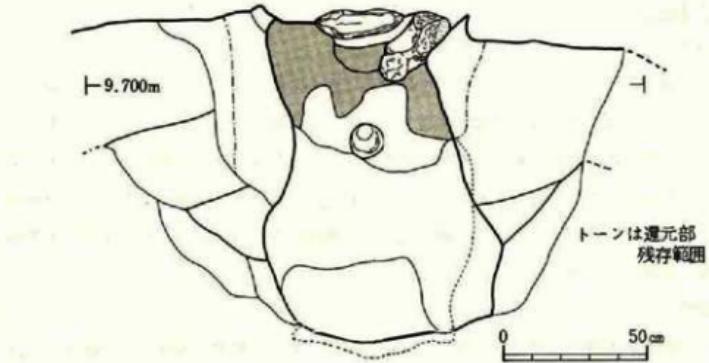
【付属施設】上部平場には他の炉と同様に方形の掘り込み2基（長辺1.0m、短辺0.9m、深さ20~50cm）が配置されている。炉の中軸線上には、径20cm奥行き20cmの横穴状ピットがある。さらにその上部は一段高く、テラス状の平坦面があり、その際には、幅30~50cm、深さ10~50cmの溝がコの字型に巡っている。

炉の南側の作業場は、長辺約3m、短辺約2.5m、深さ約0.6m~1mを計る。それより南側には廃滓場が扇状に広がっている。作業場内堆積土は下層ほど水平に堆積するが、上層になるとつれて南から北へと傾斜している。土層は上層がシルトを中心としているが、下層は細かい鐵滓を含み、踏みかためられている。

【遺物】鐵滓、送風管、炉壁、砂鉄、土師器甕、須恵器甕、礫が出土している。



第8図 1号製鉄炉南北セクション図



第9図 1号製鉄炉立面図

### 3号製鉄炉

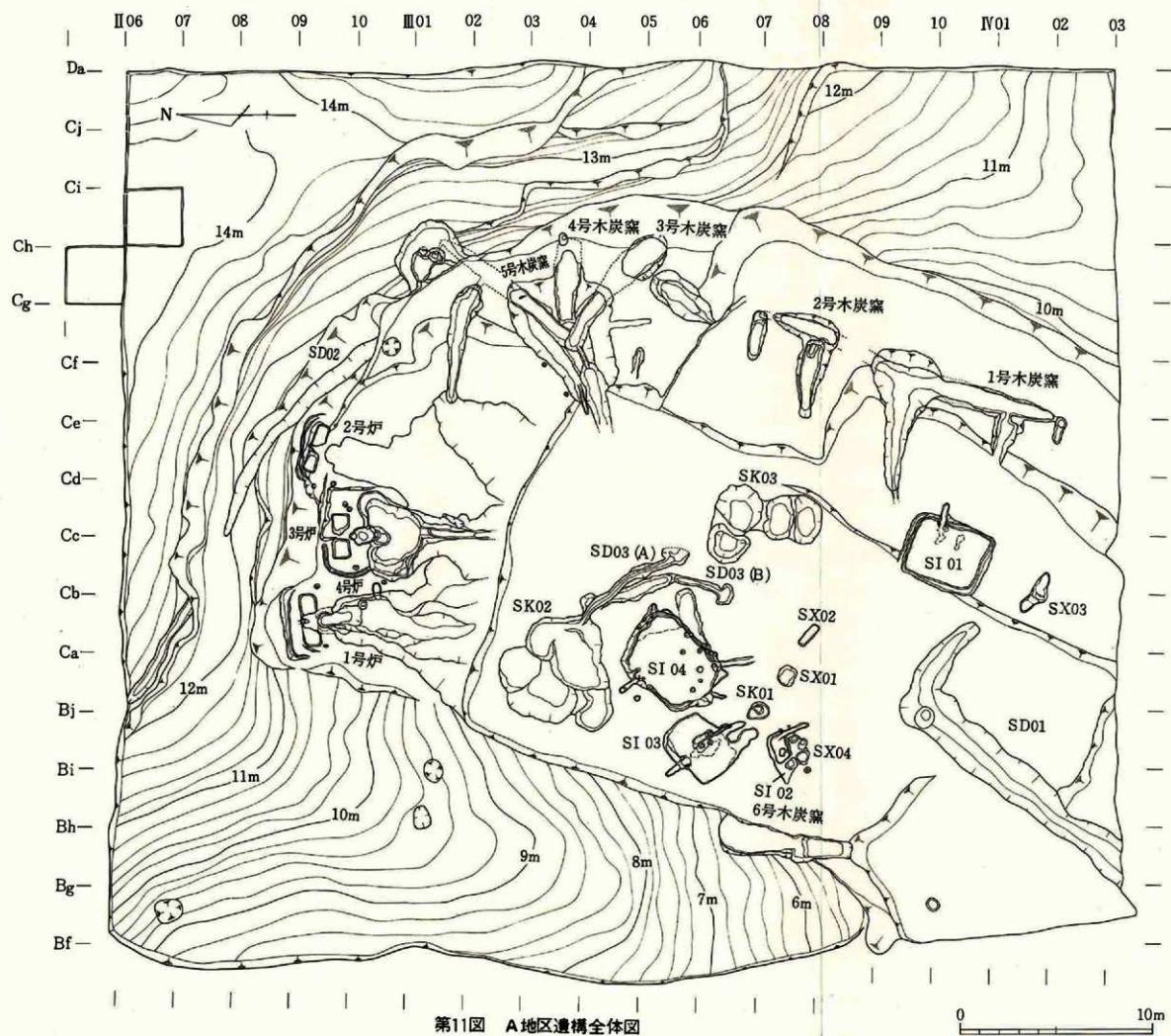
【構造】他の炉と同様半地下式竪型炉である。確認面で炉内径が $40 \times 50\text{cm}$ 、深さ約1mを計る。炉壁はスサ入り粘土で作られており、少なくとも3枚の重なりが確認できる。これらは、炉の上半部に残存しており下半部は掘り方埋土が露出している。炉背部には、長椭円形の貫通孔が認められ、炉内には送風管が炉壁に付着したまま、ずり落ちた形で検出している。炉前の両側には50cm程の細長い石が立てられており、それを囲むようにして礫が横位に据えられている。また周辺にも10~20cm大の礫が散乱していた。

【付属施設】上部平場には製鉄炉を中心として左右対称に長軸 $1.1\text{m}$ 、短軸 $0.9\text{m}$ 、深さ5~40cmを計る方形の掘り込みがある。この掘り込みの両端には柱穴が配置されている。また、これらを囲むようにして幅約20cm、深さ約5~10cmの周溝が巡っている。

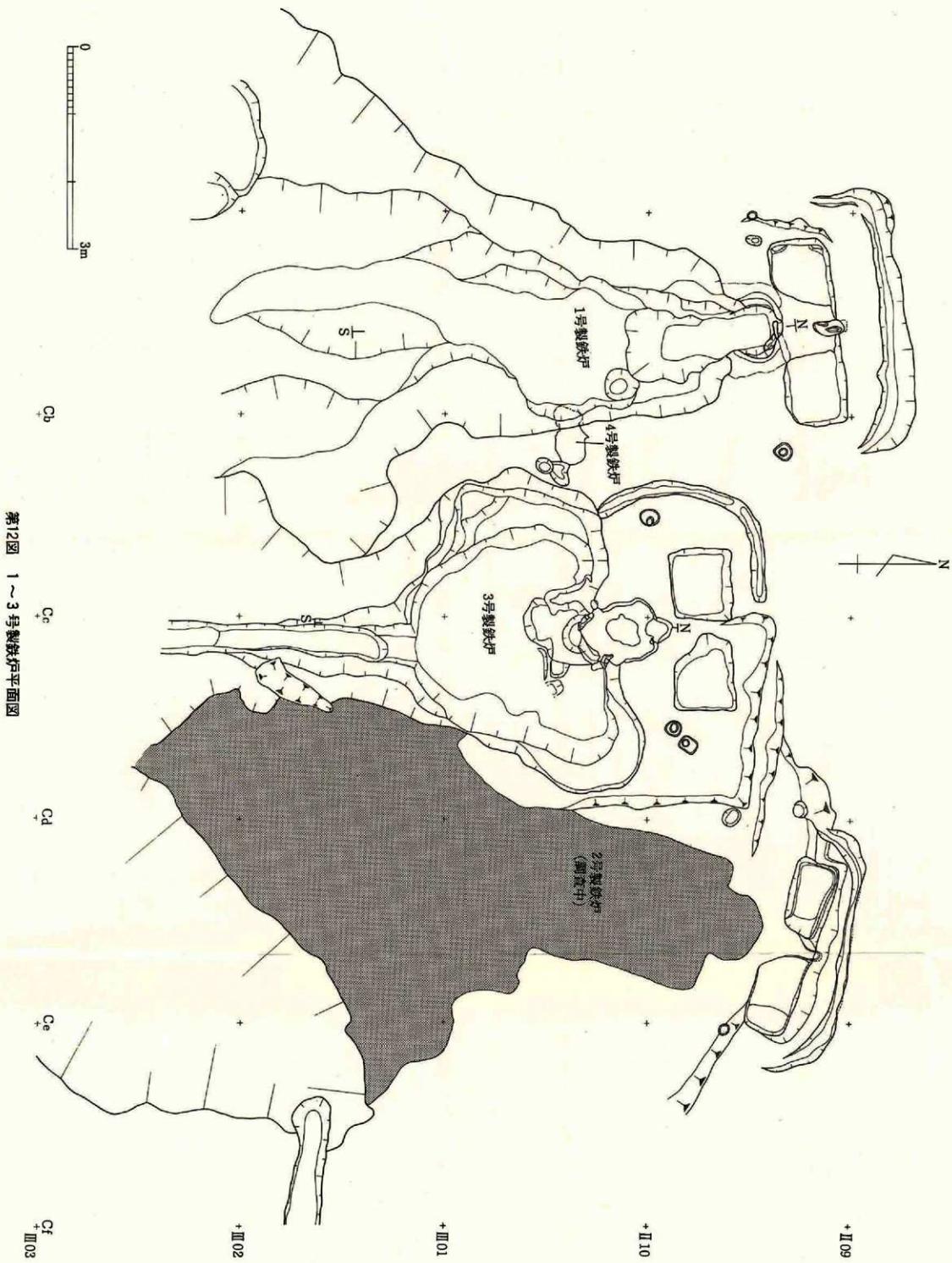
炉の南側には、長辺 $4.5\text{m}$ 、短辺 $2.5\text{m}$ 、深さ約80cmを計る作業場が配置されている。この作業場南辺のほぼ中央には幅 $0.5\sim 1\text{m}$ 、深さ5~40cmの溝が取り付き南方へ延びている。長さは約4mまで検出している。また、作業場内の炉前には長軸 $1.2\text{m}$ 、短軸 $1\text{m}$ を計る椭円形の掘り込みがあり、西側にはカマドのソデに似た高まりが付いている。



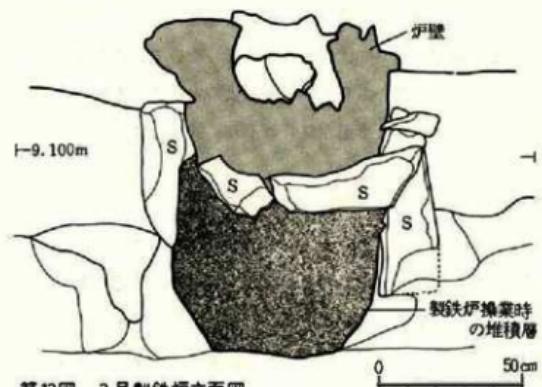
第10図 3号製鉄炉南北セクション図



第11図 A地区遺構全体図



第2図 1～3号製鉄炉平面図



第13図 3号製鉄炉立面図

〔造物〕作業場内の堆積土、各層から多量の鐵滓、炉壁、砂鉄、送風管、土師器甕がある。溝にも多量の鐵滓が充填されていた。

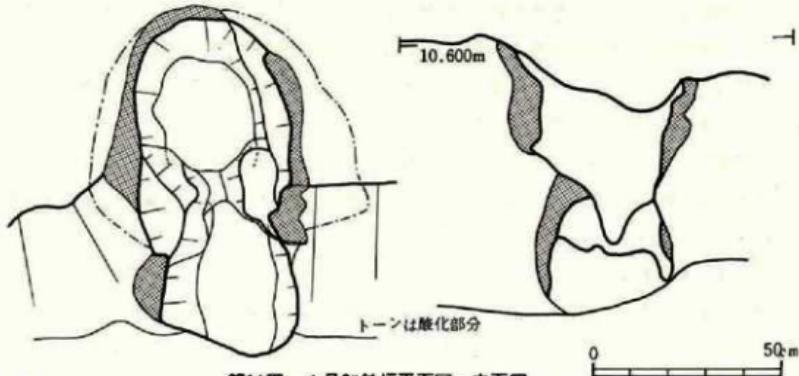
#### 4号製鉄炉

〔構造〕他の炉と比較すると小型であるが同じ半地下式堅形炉の形態をとる。炉内径が38×40cm、

深さは60cmを計る。掘り方底面上には厚さ20cm程に焼土と木炭の混じった黒褐色シルトを敷きつめている。炉前には粘土を用いて浅い溝を造っており、湯口と考えられる。炉内壁は赤橙色を呈しており酸化している。還元面はみられない。

〔付属施設〕炉前に長さ40cm、幅30cm、深さ5~8cmの浅い窪みを造っているが、他については1・3号製鉄炉作業場に壊されており不明である。

〔造物〕炉内堆積土中より土部器甕、炉壁片、鐵滓が出土している。



第14図 4号製鉄炉平面図・立面図

#### (2) 木炭窯

木炭窯は3基の製鉄炉をはさみ込むように、舌状に張り出す丘陵部東側に5基、西側に1基存在する。形態的に見ると、1号・2号木炭窯のように一つの前庭部を共有するもの、3号・4号・5号木炭窯に見られるように3基の木炭窯が一つの前庭部を共有しているもの、単独で

存在する6号木炭窯など3タイプがある。更に、4号・6号木炭窯を除いては、炭化室に付属施設として作業場が取り付いている。構造については、天井が崩落しないで当時の様子をとどめている5号木炭窯、更に、2号・3号木炭窯のあり方から地下式の木炭窯と理解できる。6号木炭窯については、場所、形態などが若干異なる面が見られるが、同様の構造をとっていたものと考えられる。

#### 1・2号木炭窯

丘陵部東側に位置する。窯本体の方向は、1号は北側、2号は南側に延びている。

【煙道】 1号木炭窯で確認された。炭化室の先端部より南側に延びる。煙道の先には長径1.4m×短径0.5mの長楕円形状の土炉に煙出しが伴っている。壁は黒色化して硬い。

【炭化室】 いずれも平面形は先端がすぼまる長方形を呈する。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は黒色化して硬い。焚口部よりそれぞれ約16°、12°の傾斜をもって立ち上がっている。

【焚口部】 1号木炭窯については、炭化室との境が若干くびれて前庭部に続く。壁は赤化している。

【前庭部】 焚口部付近は丸みを帯びた不整形を呈する。炭化室と交差するように作られている。西側は削平を受け大きく削られている。

【中軸線の方向】 1号木炭窯N-21°-E、2号木炭窯S-15°-W

【付属施設】 1号・2号木炭窯の炭化室に取り付いている。平面形はいずれも方形状である。1号木炭窯の作業場は炭化室に連結する部分がすぼまる形態となっている。これに対して2号木炭窯にはトンネル状の穴が確認されている。床面は平坦面を呈している。壁は垂直に立ち上がり、連結部に近いほど黒色化している。

【規模】 1号木炭窯・奥行き7.64m(付属施設・奥行き2.11m、上幅0.8~1.1m)

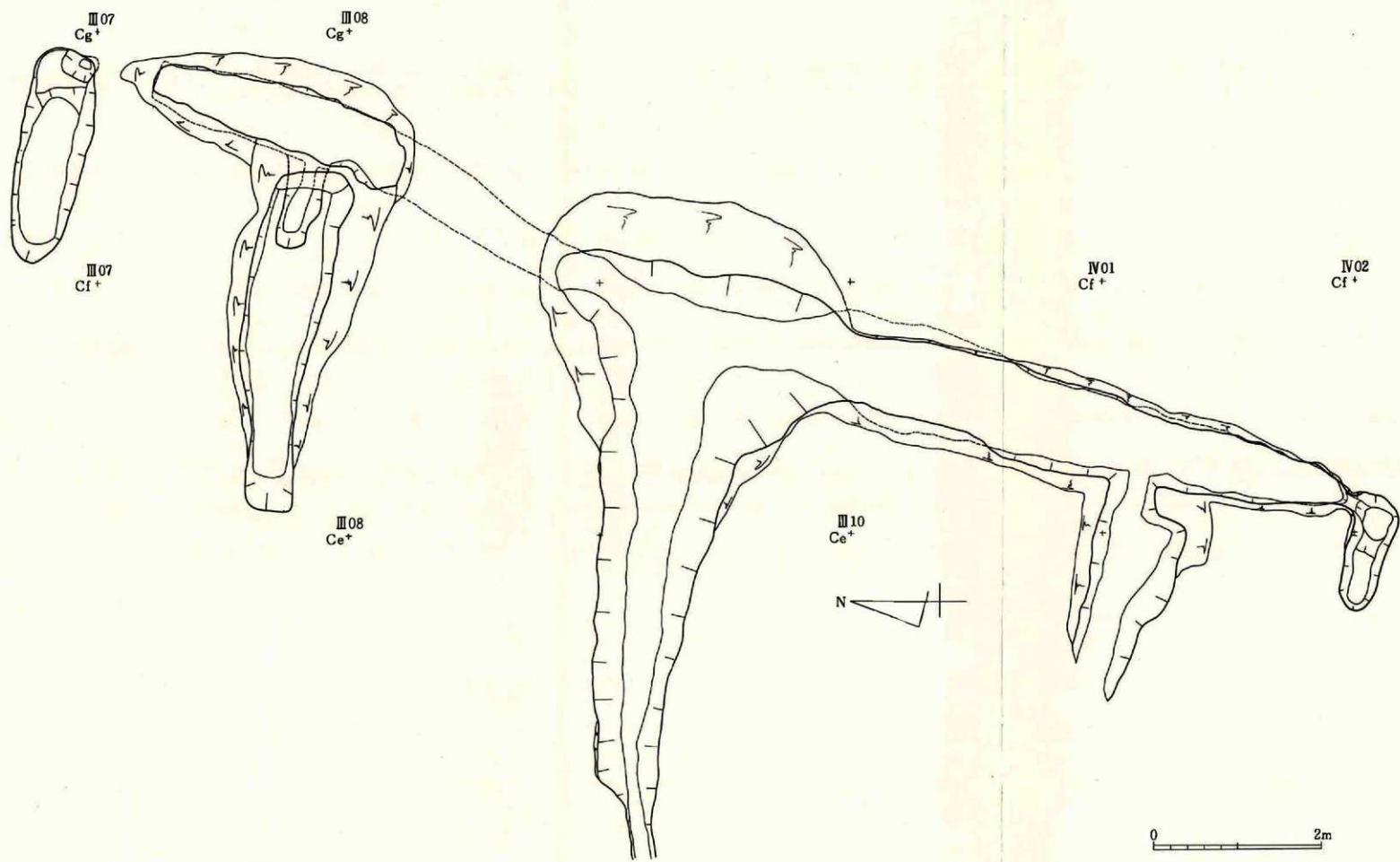
2号木炭窯・奥行き7.32m、上幅0.4~0.8m(付属施設・奥行き4.63m、上幅0.53~1.78m・前庭部奥壁まで7.3m、上幅0.74m)

#### 3・4・5号木炭窯

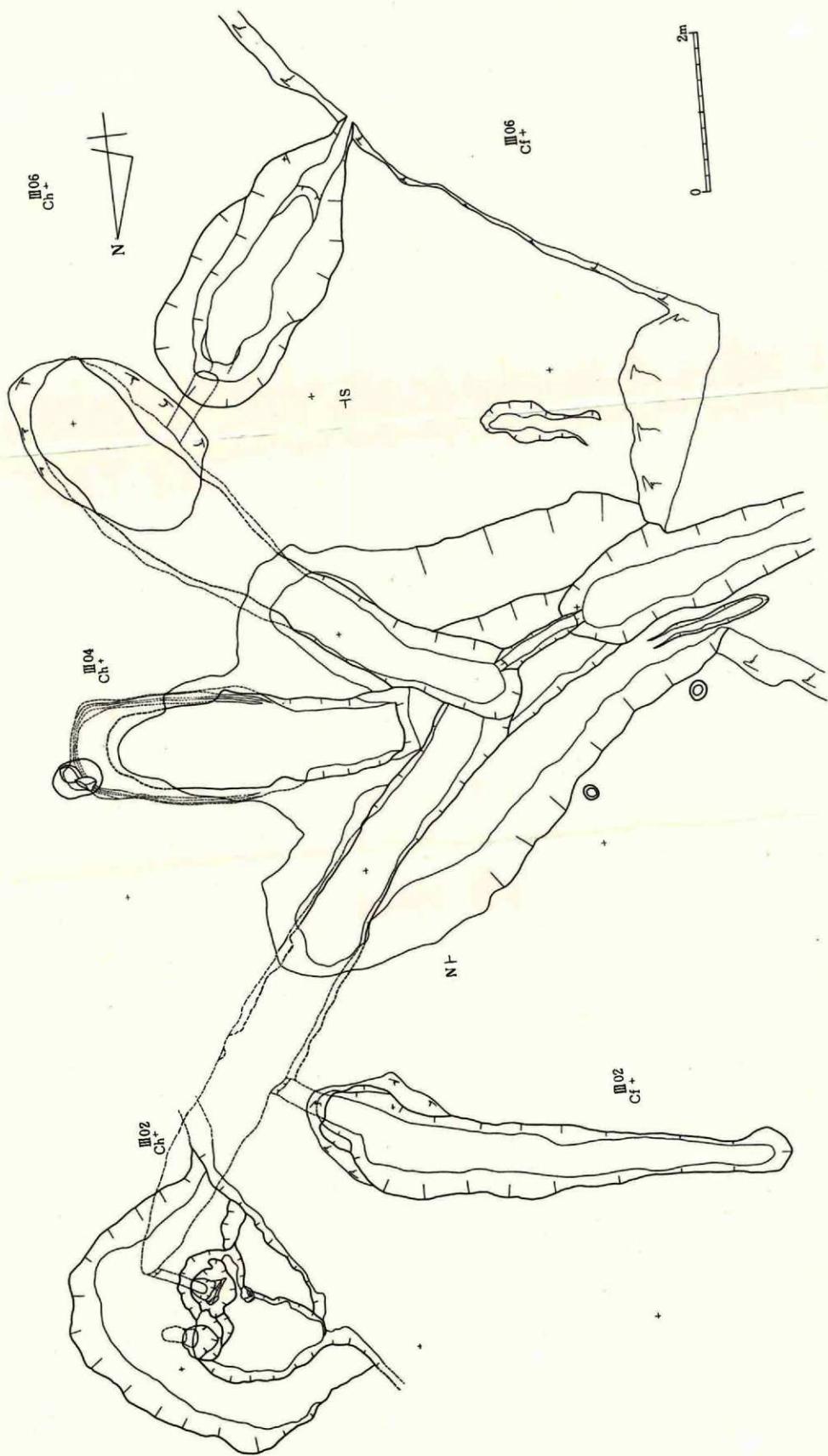
調査区東側丘陵部の奥まった場所にある。操業は前庭部に堆積した木炭屑の層序により、4号木炭窯が一番新しいことが判明した。

【煙道】 4号・5号木炭窯で確認されている。4号木炭窯は中軸線よりやや北側に位置する。炭化室の奥壁よりほぼ垂直に掘り込みを行ない、円形状の煙道が炭化室の外を上に延びている。壁は黒色化及び赤化して硬い。5号木炭窯は奥壁より右端に取り付く。煙出し地点には、約3.5m×1.5mの掘り方状の施設を伴っている。

【炭化室】 3号木炭窯は方形、4号木炭窯は長方形、5号木炭窯は先端がすぼまる細長い長



第15図 1・2号木炭素平面図



第16圖 3・4・5号木炭窯平面図

方形を呈する。壁はいずれも垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は黒色化して硬い。傾斜角度は焚口部よりそれぞれ  $8^{\circ}$  、  $18^{\circ}$  、  $12^{\circ}$  を計る。なお、4号木炭窯には周溝が巡っている。

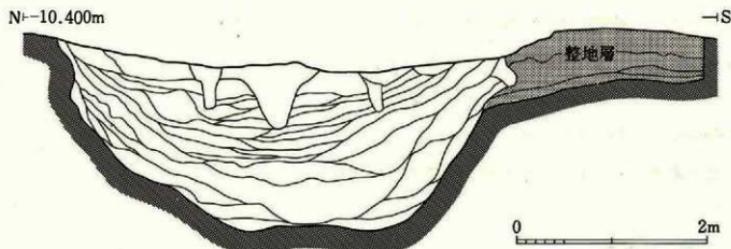
〔焚口部〕 操業時で一番新しい4号窯についてみれば、炭化室より一段低いレベルにある。

〔前庭部〕 平面形は方形状を呈する。灰層が厚く堆積し、その上層には崩壊土、整地層がある。西側部分については削平で大きく削られている。壁は垂直気味に立ち上がり、床面より溝状の落ち込みが認められる。壁際には上屋を支えたと思われるピットがある。

〔中軸線の方向〕 3号木炭窯・S- $52^{\circ}$ -E、4号木炭窯・N- $90^{\circ}$ -E、5号木炭窯・N- $35^{\circ}$ -E

〔付属施設〕 3号・5号木炭窯を取り付いている。平面形は方形状を呈している。いずれもトンネル状の穴が3号には2ヶ所、5号には1ヶ所認められる。壁は垂直気味に立ち上がり、床面は3号木炭窯についてはすり鉢状を呈するが、5号木炭窯は平坦面を呈する。

〔規模〕 3号木炭窯・奥行き7.5m、幅1~1.35m（付属施設・奥行き3.8m、上幅1.1~1.73m）、4号木炭窯・奥行き4.2m、幅1.2~1.4m、5号木炭窯・奥行き8.2m以上、幅90cm（付属施設・奥行き5.7m、幅1.1~1.4）



第17図 3～5号木炭窯前庭部セクション図

### 6号木炭窯

調査区西側丘陵部に位置する。削平のための炭化室及び前庭部は失われている。

〔炭化室〕 平面形は先端が丸みを持つ長方形を呈している。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は平坦で黒色化して硬い。焚口部より北側に向いており、約 $16^{\circ}$ の傾斜をもって立ち立がっている。

〔焚口部〕 床面がわずかに下がるだけである。炭化室との境はいくぶん狭くなっている。

〔前庭部〕 平面形は長方形を呈し、両隅は角張っている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はすり鉢状を呈する。

〔中軸線の方向〕 N-11°-E

〔規模〕 炭化室は焚口部より奥壁まで4.05m、幅1.0~1.64m、前庭部は3.08m×0.48~1.47mを計る。

### (3) 槫穴住居跡

#### SI 01 槫穴住居跡

〔位置・平面形・規模〕 調査区東側の1号・2号木炭窯が共有する作業場に隣接している。平面形は、西壁の一部が削平のため失われているが、隅丸方形を呈している。規模は、長辺4.4m×短辺3.5mである。

〔壁・床面・施設〕 壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.11~0.4mを計る。床面は平坦面を呈し、カマド付近及び南側に焼土の分布が認められた。周溝は、幅0.12~0.49m、深さ4~20cmを計る。

〔カマド〕 東壁のやや南側に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は床面とほぼ同一のレベルである。煙道部は長さ約80cm、幅約30cm程度で燃焼部より若干立ち上がっている。

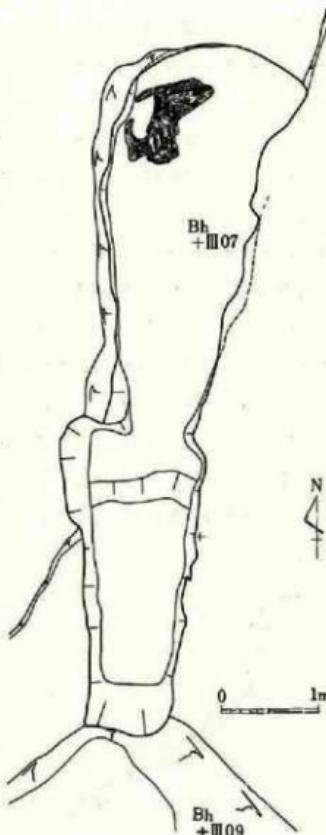
〔出土遺物〕 わずかに埋土内より鐵滓が数点出土したのみである。

#### SI 03 槫穴住居跡

〔位置・平面形・規模〕 6号木炭窯の東側に隣接して検出した。隅丸状の長方形を呈し、長辺約3.5m、短辺約2.5mを計る。南東辺には、2本の溝状の張り出しが取り付く。

〔壁・床面・施設〕 壁は、床面からほぼ垂直に近く立ち上がり、5~40cmを計る。北東壁ほど保存が良い。床面はほぼ全面に貼り床をしているが、他は地山を床としている。住居のはば中央には、厚さ1~2cmの細かい鐵滓の層が分布している。この層を除去したところ床面上で浅いピットが2基検出された。また、その東側には溝がつくられている。溝の中央には、直径30cm、深さ約20cmのピットが設けられている。

〔カマド〕 カマドは北壁のほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部床面は若干窪んでおり、さほど火熱を受けた痕跡は認められない。煙道は長さ約90cmあり、深



第18図 6号木炭窯平面図

さ約10cmを計る。

〔出土遺物〕溝の付属ピット、及び底面から土師器斐2点、西側壁近くには礎が並んで検出された。その他に、鐵滓、鍛造剝片がある。

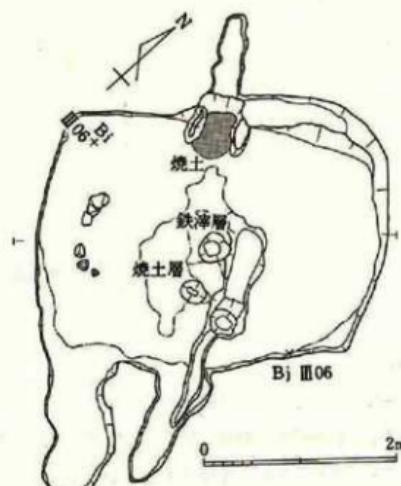
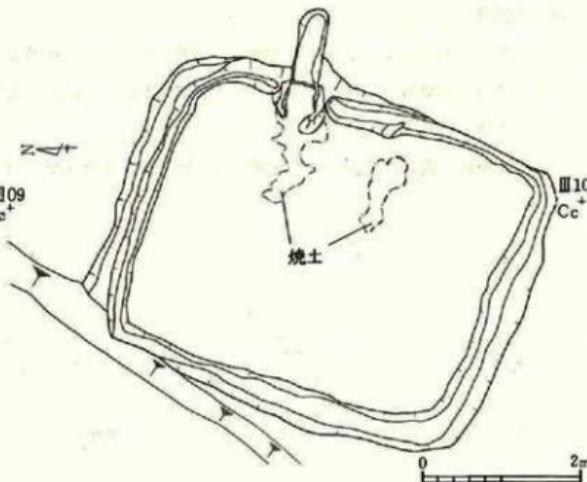
#### S I 04竪穴住居跡

〔位置・平面形・規模〕

S I 03竪穴住居跡の東側に隣接して検出した。隅丸状の長方形を呈し、長辺約5m、短辺約3.8mを計る。

〔壁・床面・施設〕壁は、東壁が比較的ゆるやかに立ち上がるが、他は床面からほぼ垂直に近く立ち上がる。壁高は10~30cmある。床面は北東辺を除いてほぼ全面に貼り床をしている。ピットは周溝ぎわにいくつか検出しているが全周するものではない。

〔周溝〕周溝はカマドを除く住居の壁にそつて巡っている。幅15cm~35cm、深さ2~7cmを計る。また、南西隅

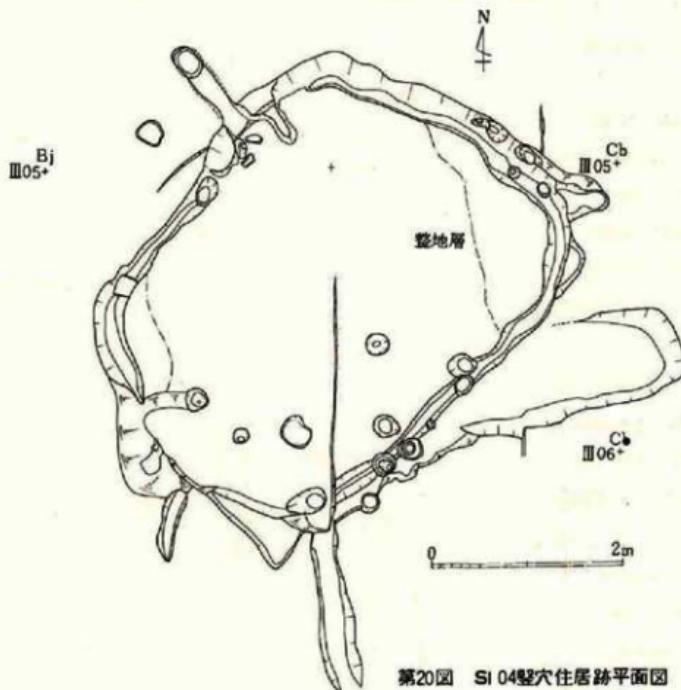


第19図 S I 01・03竪穴住居跡平面図

から住居外へと延びている。

【カマド】 カマドは北壁のやや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部内からは須恵器壺破片、礫が検出された。煙道は基底幅約25cm、長さ1.1mを計り、先端付近はピット状に窪んでいる。

【出土遺物】 遺物は床面上より土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄滓、礫が出土している。



第20図 SI 04壁穴住居跡平面図

#### (4) 土 坡

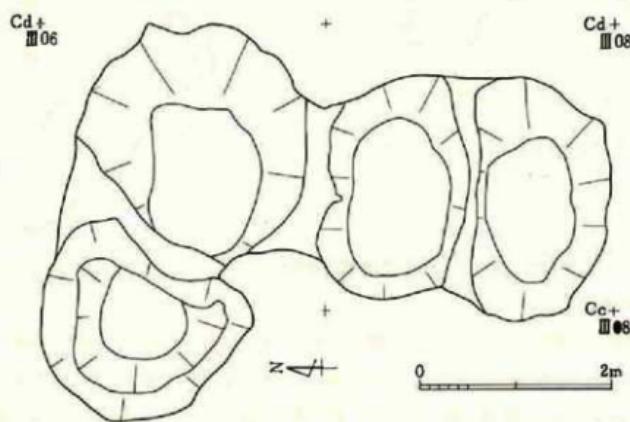
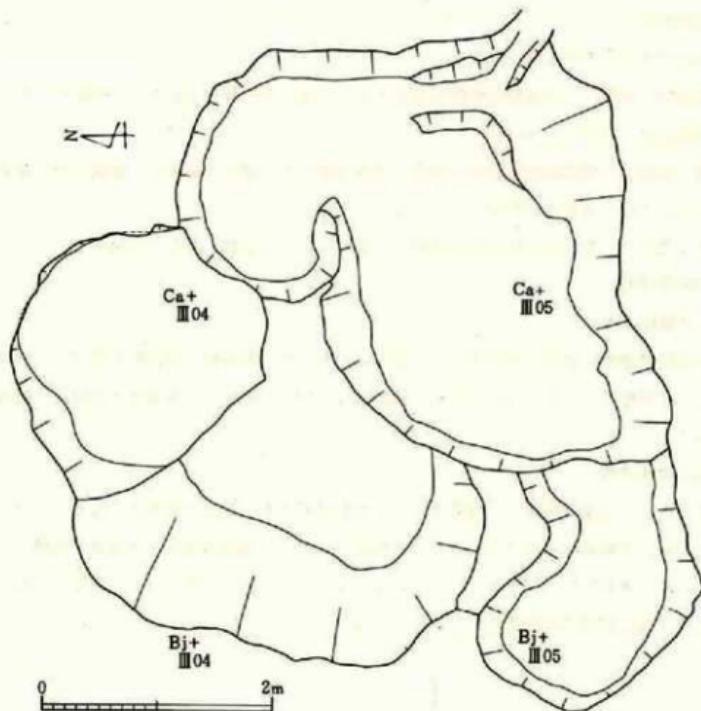
##### SK02土坡

調査区中央部平場の北西端に位置する。

【平面形・規模】 平面形は不整形を呈し、土坡状の掘り込みが5ヶ所認められる。南東辺付近にはSD03(A)溝跡が取り付く、規模は南北、東西とも約6mで、深さは30cm~70cmを計る。

【壁・底面】 壁は北辺付近が垂直に近く立ち上がるが、他は緩やかに傾斜する。底面から壁下半にかけては基本層位Ⅲ~Ⅳ層の粘土質シルトが露出している。

【出土遺物】 床面上に堆積する黒色粘土層より土師器甕、須恵器甕、鉄滓、炉壁片が出土している。



第21図 SK 02・03土壤平面図

### SK 03 土塁

調査区中央部平場の東側に位置する。

〔平面形・規模〕 平面形は不整形を呈するが、土塁状の掘り込みが4ヶ所認められる。規模は長辺5.6m、短辺2.25mを計る。

〔壁・底面〕 壁は底面よりゆるやかに立ち上がるすり鉢状を呈する。底面は粘土層である。最も南側の土塁には砂鉄が堆積している箇所がある。

〔出土遺物〕 埋土の灰白色火山灰層の下層より、須恵器甕、礫などが出土地している。

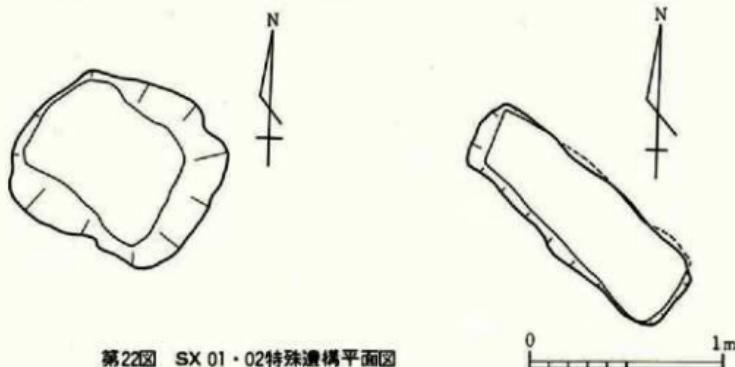
### (5) 特殊造構

#### SX01特殊造構

S X 04特殊造構の東側に位置する。平面形は不整形、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸1m、短軸90cm、深さ40cmを計る。底面上には約3cmの厚さで木炭層が堆積し、壁面は赤く焼けている。

#### SX02特殊造構

S K 01土塁の南東に隣接して位置する。平面形は長方形、壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。長軸1.35m、短軸45cm、深さ40cmを計る。底面上には6~15cmの厚さで木炭層が堆積し、その上層ににぶい黄橙色粘土質シルトが貼られている。さらにその上層にも4cmの厚さで木炭層が堆積している。壁はほぼ全面赤化し焼けている。



第22図 SX 01・02特殊造構平面図

#### SX03特殊造構

調査区東側の一段高いテラス状の小平場に位置し、S I 01 穴住居跡の南側に隣接する。平面形は溝状を呈し長さ2.5m、幅0.5~0.9m、深さ10~20cmを計る。東端の奥まった部分が壁、床面とも0.9m×0.5mの範囲で焼けている。壁はほぼ垂直に近く立ち上がり、底面は西側に向かって傾斜している。遺物は土師器甕の破片が出土している。

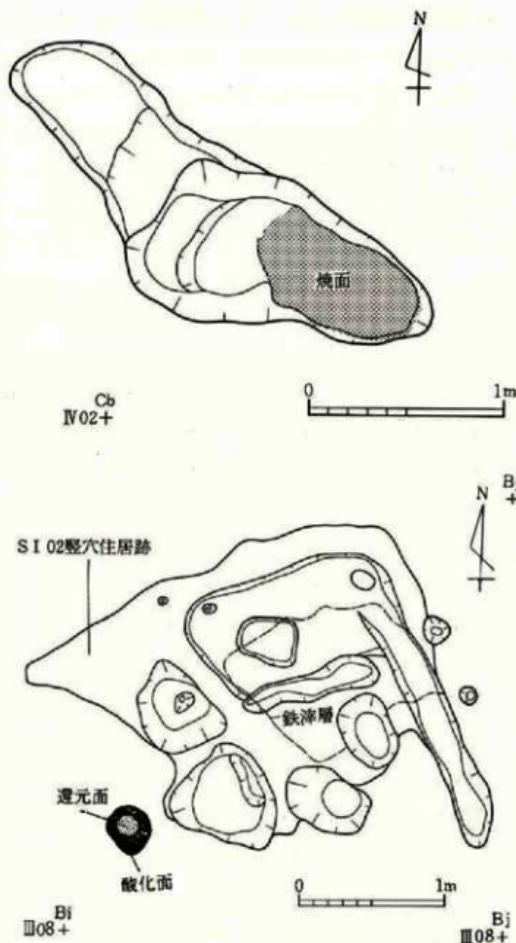
### SX04特殊造構・SI02豎穴住居跡

S X 04特殊造構は、S I 03豎穴住居跡の南側に隣接して検出した鍛冶炉、ピット、豎穴状の窪みからなる鍛冶工房跡である。S I 02豎穴住居跡と重複しておりこれより新しい。豎穴状の窪みの形態は、隅丸状長方形で南辺は溝によって切られている。規模は長辺1.4m、短辺0.8m（推定）、深さ3～5cmを計る。東辺には長さ1.8m、幅25～30cm、深さ10～20cmの溝が取り付いている。床面直上には南辺をオーバーフローして鉄滓層が2～3cmの厚さで堆積していた。この鉄滓層中には多量の鍛造剝片が含まれていた。また、北西隅に羽口、北東隅には焼形滓が検出された。この豎穴状の窪みの西側には、ピット3基と、鍛冶炉が配置されている。ピットは径40～60cm、深さ20～40cmの不整円形を呈する。鍛冶炉は、残存状況が悪く、還元面と酸化面のみが検出された。還元面の幅は約15cm、酸化面は還元面のまわりを10～20cmの幅をもって巡っている。S I 02豎穴住居跡は、約2.6m×約2.0mまで検出した。南・東辺は削平されており遺存状況が悪い。西辺中央の壁ぎわ床面上で羽口が検出された。

#### <発見遺物>

今回、発見した遺物には土師器杯・甕、須恵器杯、蓋、甕、送風管、羽口、鉄滓、炉壁、砂鉄、鐵塊、木炭、鍛造剝片などがある。

**土師器：**土師器は杯、甕が出土している。いずれもロクロ未使用のものである。杯は体部に



第23図 SX03・04特殊造構平面図

縁を持ち、下半部には軽いケズリが施されている。妻は底部から体部にかけてのものが出土している。底部には木葉痕があり、体部には刷毛目調整が施されている。

須恵器：須恵器は杯・蓋・妻が出土している。杯は、口縁部と底部破片が各1点ある。後者の底部には回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ調整が施される。

送風管：送風管は推定内径12～15cm位の土管状を呈するもので、先端ほどラッパ状に聞く特徴を持っている。ほとんどが破片となって各炉の廃滓場から多く出土している。管外面にはラッパ状に聞く先端部を残してノロが付着している。内面は布目圧痕のあるものと、ないものがあり、後者はナデ調整が施してある。胎土は石英を多く含むもので、質が悪い。また、粘土積み上げ痕のわかるものもある。内面に布目圧痕のあるものが出土量の大半を占めている。

羽口：羽口は2号製鉄炉廃滓場から2点、SI 02堅穴住居跡、SX 04特殊造構から各1点ずつ出土している。これらは内径3cm前後を計るが、廃滓場出土のものが厚手である。第25図5は全体の形態がわかるものである。吸気部は内弯ぎみに聞き、先端部にはノロが付着している。

鉄滓：鉄滓は各炉の作業場、廃滓場に0.5～1mの厚さで堆積している。これまでのところ総量で約15トン出土している。鉄滓は炉内残留滓、流出滓、炉底滓に分けられ、炉内残留滓が量的には大半を占めている。また、SI 03堅穴住居跡、SX 04特殊造構からも出土しているが2～3cm大のものと粒状のものが多い。粒状のものは磁着度が高い特徴をもっている。

炉壁：炉壁は各炉の廃滓場から主に出土している。いずれも破片であるが、比較的残りの良いものなどには粘土積み上げ痕が認められる。

砂鉄：砂鉄は1・3号製鉄炉の作業場・廃滓場の堆積土中からまとまって出土している。その他、SK 03土塙底面にも張り付くような状態で検出された。

木炭：木炭は1号木炭窯炭化室の焚口部付近と、6号木炭窯の炭化室奥壁近くに残存していた。

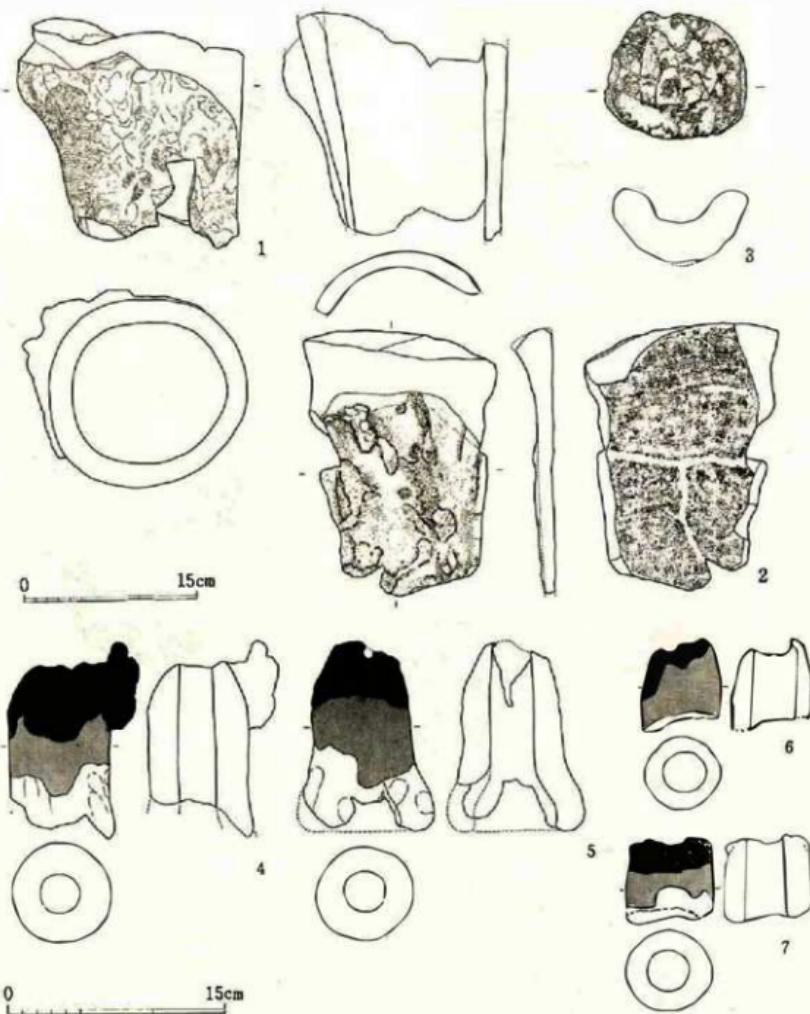
鍛造剝片（ハンマースケール）：鍛造剝片はSI 03堅穴住居跡、SX 04特殊造構の鐵滓層中から検出している。量的には後者が非常に多く、前者は少ない。大きさは2～3mm大で断面が鋭利で扁平なものとボール状を呈するものがある

## <まとめ>

1. 調査で発見した製鉄関連造構は、製鉄炉4基、木炭窯6基、堅穴住居跡4軒、特殊造構4基、土塙3基、溝跡3条である。
2. 製鉄炉は、半地下式堅型炉の構造をもつ、炉は一般に炉前がこわれているものであるが、本例は炉壁がほとんど残存しており、保存状態は極めて良好である。
3. 本遺跡の炉の構造は、炉背上部のテラスに共通した特徴をもつ。それは炉の延長中軸線上を高めに残し、その両側に一辺約1mの方形の土塙をつくり、さらにその上部には一段高く



第24図 出土遺物(1)



第25図 出土遺物(2)

テラスを作り出してこれらを囲むように溝を配している点である。

4. 従来、送風施設については不明な点が多かったが、本調査によって炉背部に貫通孔が認められ、さらに送風管が炉内に、炉壁を不着したままずり落ちた状態で発見されたことなどか

No.	遺構名	出土層位	種類	器形	外 面 調 整	内面調整	口 径	底 径	器 高
1	SI-04	E - 5	土師器	杯	ヨコナダ→爐上部へラミガキ、体部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(36.1)	—	(3.3)
2	SI-04	貼 床	土師器	杯	ヨコナダ→一部ヘラミガキ、浅縁、体部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	(37.1)	—	(4.2)
3	SK-01	埴 土	土師器	杯	ヨコナダ 体部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—
4	SI-04	E - 4	埴器	杯	ロクロ調整 底部 回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロ調整→軽いナダ	—	10.8	(3.0)
5	1号製鉄炉 廃滓場	E - 5	埴器	杯	ロクロ調整 スサ入粘土付着	ロクロ調整 スサ入粘土付着	(15.2)	—	(4.1)
6	SK-04(Plt)	3 層	土師器	甕	体部・ハケメ→ヘラナダ (基面や車輪) 底部木葉痕	事例の為に不明	—	30.2	(3.4)
7	SK-02	床面上	土師器	甕	体部・ハケメ→ヘラナダ (基面や車輪) 底部木葉痕	ナダ、内面に粘土 起毛き上げ痕	—	6.8	(6.8)
8	3号製鉄炉 廃滓場	堅地層	土師器	甕	体部ハケメ 底部 木葉痕	ナダ	—	(9.6)	(5.0)
9	3号製鉄炉 廃滓	埴 土	土師器	甕	体部ハケメ 底部 木葉痕	—	—	(8.4)	(2.3)
10	3号木炭窯 付属作業場	理上上層	土師器	甕	事例の為に不明	ヘラナダ	—	(8.3)	(9.6)
11	3号製鉄炉 廃滓場	E - 1	埴器	甕	ナダ→液状沈殿 (8免) 廓部~両部、平行叩き目→堆ナダ	傾方向のナダ	—	—	(10.6)
12	SI-03	床面上	土師器	甕	体部手持ちヘラケズリ 底部ケズリ→ヘラナダ	ヘラナダ→部分的にヘラミガキ	—	6.6	(13.9)
No.	遺構名	出土層位	種類	器形	外 面 調 整	内面調整	外 径	内 径	被覆度
1	3号製鉄炉 廃滓場	E 内	土製品	送風管	ナダ、内外面とも鉛化、ノロ付着	ナダ	17.1	13.5	19.3
2	3号製鉄炉 廃滓場	E - 1	土製品	送風管	ナダ、内外面とも鉛化、ノロ付着	布目状痕	(15.0)	(15)	23.0
3	SK-04	床面上		純型甕			11~12.3	6.5~19	6.6
4	2号製鉄炉 廃滓場	E - 6	土製品	羽 口	先端にノロ、一部鉛化している、下部に指おきえ痕		6.8	2.8	12.2
5	2号製鉄炉 廃滓場	E - 6	土製品	羽 口	先端にノロ、一部鉛化している。下部に指おきえ痕		6.8	3.0	13.1
6	SI-02	E - 3	土製品	羽 口	先端に溶けた鉄付着 (ノロ) 一部鉛化している。		5.0~5.3	2.9	5.5
7	SK-04	床面上	土製品	羽 口	先端に溶けた鉄付着 (ノロ) 一部鉛化している。		5.6~6.0	2.8	5.7

#### 出土遺物(1)・(2)観察表

ら、炉背部分から送風していたことが確実となった。よって炉背上部の施設は送風施設と考えられる。

- 木炭窯は、地下式の構造を取り、形態分類から①前庭部を共有し、窯体が丘陵尾根線に対して平行につくられるもの（1号・2号木炭窯）②前庭部を共有し、丘陵尾根線に対して窯体がやや直交してつくられるもの（3号・4号・5号木炭窯）③単独で存在し、丘陵尾根線に対して平行につくられるもの（6号木炭窯）の3形態が存在する。
- 1号、2号、3号、5号には、付属施設を有する。形態は先端部が溝状に細長くすぼまり窯体接合部分は円筒状を呈する。連結部位は窯体の中央部より上部に位置し、1ヶ及び2ヶのトンネル状の窓がついている。
- 窯体内部は炭化室が細長く、傾斜がきつい特徴をもっている。

- 豎穴住居跡（S I 02・03）からは羽口、鐵造剣片、細鐵滓集積層を検出している。これらの出土遺物より本住居跡は鐵治工房跡と考えられる。また S X 04特殊遺構では、鐵治炉が単独で存在しそれに付属する作業場（ピット豎穴状の窪み）を検出した。
- S X 01～03特殊遺構は壁面の酸化、底面上木炭層のあり方から、焼成遺構と考えられる。SK 02・03土塙は、円形あるいは楕円形の土塙群が複合したもので、底面は黄色粘土層まで到達している。これらの土塙群はこの粘土を採掘するために掘られたものであろう。
- 製鉄遺構の年代については遺構内から出土した土器を検討することにする。土器は土師器杯・甕と須恵器甕が出土している。土師器は全てロクロ未使用のもので、杯には国分寺下層式に比定できるものがある。また甕の口縁部には頸部に軽い段をもつものや、底部に木葉痕をもつものがある。また須恵器では甕の口縁部に波状の櫛目模様があるものや、底部が回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整を施す杯が出土している。これらは總じて8世紀代の遺物であり、製鉄炉の中で最新の3号炉からも9世紀以降に下る遺物は出土していない。以上のことから、本製鉄遺構は8世紀～奈良時代～におさまるものと考えられる。

#### ＜参考・引用文献＞

##### （B 地区）

飯田俊昭 「宮城県における旧石器時代前・中期の諸問題」『旧石器考古学34号』P. 25～46 (1987)

北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫 「仙台地域の地質」地質調査所 1986'

石器文化談話会編 「座敷乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 石器文化談話会誌第3集 (1983)

多賀城市・多賀城市教育委員会「志引遺跡発掘調査報告書」(1984)

東北歴史資料館・石器文化談話会 「馬場塙A遺跡」～前期旧石器時代の研究～ (1986)

中川久夫 「本邦太平洋沿岸地方における海水準静の変化と第四紀編年」『地質学古生物学教室研究報文報告54』P. 1～6 (1961)

##### （A 地区）

鶴島武治・穴沢義功 「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺跡」考古学雑誌55-2 (1969)

菅原後行他「坂ノ上E遺跡」秋田臨空港新都市開発開拓埋蔵文化財発掘調査報告書、秋田市教育委員会(1984)

郷瀬英司・田井知二他 「花前II-1・花前II-2・矢船」常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ千葉県文化財センター (1985)

雄山閣 「古代日本の鉄を科学する」『季刊考古学第8号』 (1984)

(財)福島県文化センター 「相馬開発と遺跡～相馬開発開拓調査概報～」『福島県文化財調査報告書第151集』 (1985)

(財)福島県文化センター 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ」『福島県文化調査報告書第166集』(1986)

(財)福島県文化センター 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ」『福島県文化財調査報告書第179集』(1987)

(財)千葉県文化財センター 「研究紀要7」 (1983)

たたら研究会 「日本古代の鉄生産」『1987年度たたら研究会大会資料』 (1987)

東京工業大学製鉄史研究会 「古代日本の鉄と社会」平凡社選書78 (1983)

窟田義郎 「製鉄遺跡」ニューサイエンス社 (1983)

高橋一夫 「古代の製鉄」『採鉱と冶金』日本評論社 (1983)

佐佐藤彦 「日本古代製鉄遺跡に関する研究序説」とくに炉形を中心に』『たたら研究第24号』 (1981)

間 滉 「富山県における古代製鉄炉」『大境第8号』富山県考古学会 (1984)

間 滉 「製鉄用炭窯とその意義」『大境第9号』富山県考古学会 (1985)

宮城県教育委員会 「硯沢・大沢窯跡はか」『宮城県文化財調査報告書第116集』 (1987)

埼玉県教育委員会「大山」『埼玉県遺跡調査報告書第23集』 (1979年)

# 炉材粘土他耐火度測定報告

川鉄テクノリサーチ株式会社  
総合検査・分析センター  
総括技術室

## 1. 試 料

試料No	造 構 ・ 層 位	造 物
1	S X 04特殊造構	羽 口
2	基本層位第Ⅲ層	土 壤
3	1号製鐵炉	送 風 管
4	*	炉材粘土
5	3号製鐵炉	*

## 2. 試験方法

JIS R 2204「耐火れんがの耐火度の試験方法」による。

## 3. 試験結果

試料No	耐火度 (S K)	色	試験錐の状態
1	5a-	茶 黄	膨張、——
2	16+	黄 灰	膨張、錐面アバタ状
3	8	茶 黄	膨張、錐面アバタ状
4	05a*	茶	膨張、——
5	05a	茶	膨張、錐面アバタ状

注) 耐火度と温度との関係は別紙の「ゼーゲル及びオルトンコーン温度比較表」をご参照下さい。

ゼーゲル及びオルトンコーン温度比較表

ゼーゲル、コーン 華氏	コーン 番号	オルトン、コーン		ゼーゲル、コーン 華氏	コーン 番号	オルトン、コーン 華氏	
		摂氏	華氏			摂氏	華氏
1112	600	022	605	1121	3	1170	2138
1202	650	021	615	1139	4a	1190	2174
1238	670	020	650	1202	4		
1274	690	019	660	1220	5a		
1310	710	018	720	1328	5	1205	2201
1346	730	017	770	1418	6a	1230	2246
1382	750	016	796	1463	6	1250	2282
1454	790	015a		2246	7	1260	2300
		015	805	1481	8	1285	2345
1490	815	014a		2336	9		
		014	830	1526	10	1305	2381
1535	835	013a		2372	11	1325	2417
		013	860	1580	12	1337	2439
1571	855	012a		2408	13	1349	2460
		012	875	1607	14	1398	2548
1616	880	011a		2462	15	1430	2606
		011	895	1643	16	1491	2716
1652	900	010a		2516	17	1512	2754
		010	905	1661	18	1522	2772
1688	920	09a		2570	19	1541	2806
		09	930	1706	20	1564	2847
1724	940	08a		2615	21	1605	2921
		08	950	1742	22	1621	2950
1760	960	07a		2660	23	1640	2984
		07	990	1814	24	1646	2995
1796	980	06a		2732	25	1659	3018
		06	1015	1859	26	1665	3029
1832	1000	05a		2768	27	1683	3061
		05	1040	1904	28	1699	3090
1868	1020	04a		2802	29	1717	3123
		04	1060	1940	30	1724	3135
1904	1040	03a		2837	31	1743	3169
		03	1115	2039	32	1763	3205
1940	1060	02a		2876	33	1785	3245
		02	1125	2057	34	1804	3279
1976	1080	01a		2914	35	1820	3308
		01	1145	2093	36	1835	3335
2012	1100	1a		2952	37	1865	3389
		1	1160	2120	38	1885	3425
2048	1120	2a		2990	39	1907	3578
		2	1165	2129	40	2015	3659
2084	1140	3a		3028	41		

注：コーンでは正確な温度の測定はできない。耐火度の数値を概略の温度で示す場合にのみ上表の温度が使われる。

オルトンコーンはA.S.T.M.によって認定されており、J. Amer. Cer. Soc. 9.

701-43, 1926に記載せられている Fairchild と Peters の試験を基としている。

本表の温度は一般的焼成および耐火材料の使用の際ににおけるような緩かな加熱速度には適用できない。

B地区図版1  
調査区遠景（北から）



B地区図版2  
調査区近景（東から）  
(白紙は石器出土地点)



B地区図版3  
調査区近景（西から）





B 地区図版4  
発掘風景  
第2石器集中地点  
（南から）  
ディレビヤンコ博士ら  
(ソビエト)

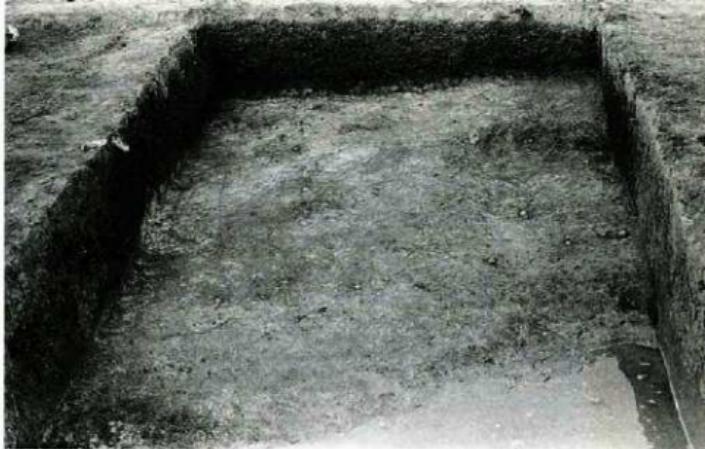


B 地区図版5  
B I-g ライン谷頭  
地層断面（東壁）



B 地区図版6  
B I-h ライン地層  
断面（東壁）

B地区図版7  
第1石器集中地点  
(南から)

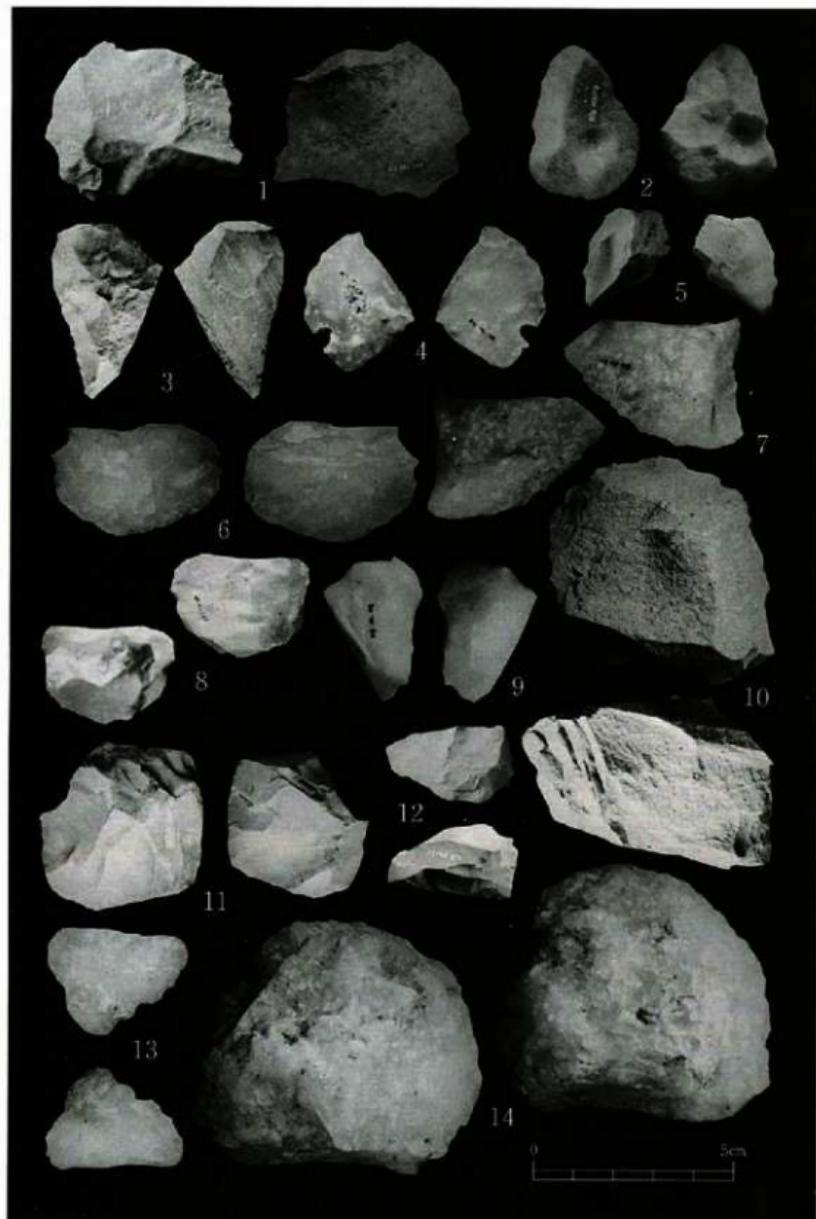


B地区図版8  
第4石器集中地点  
(西から)

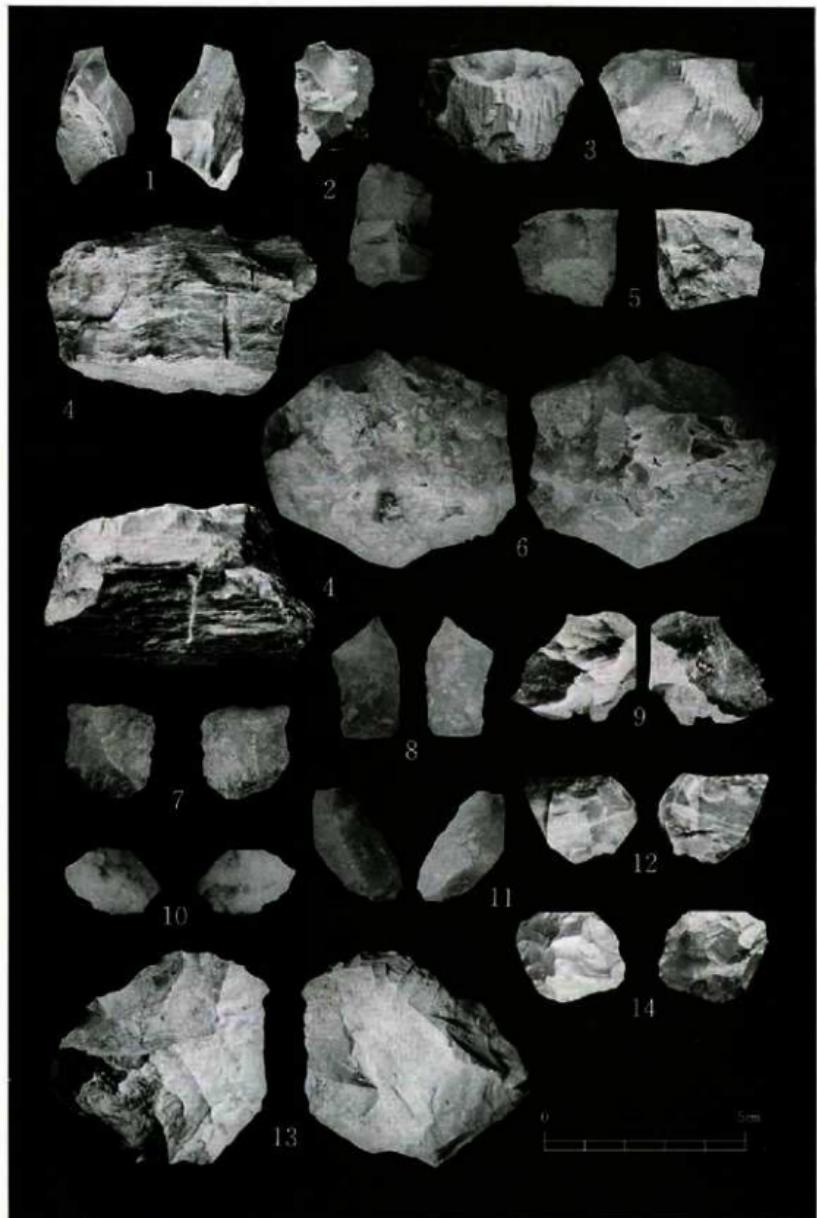


B地区図版9  
第5石器集中地点  
(西から)

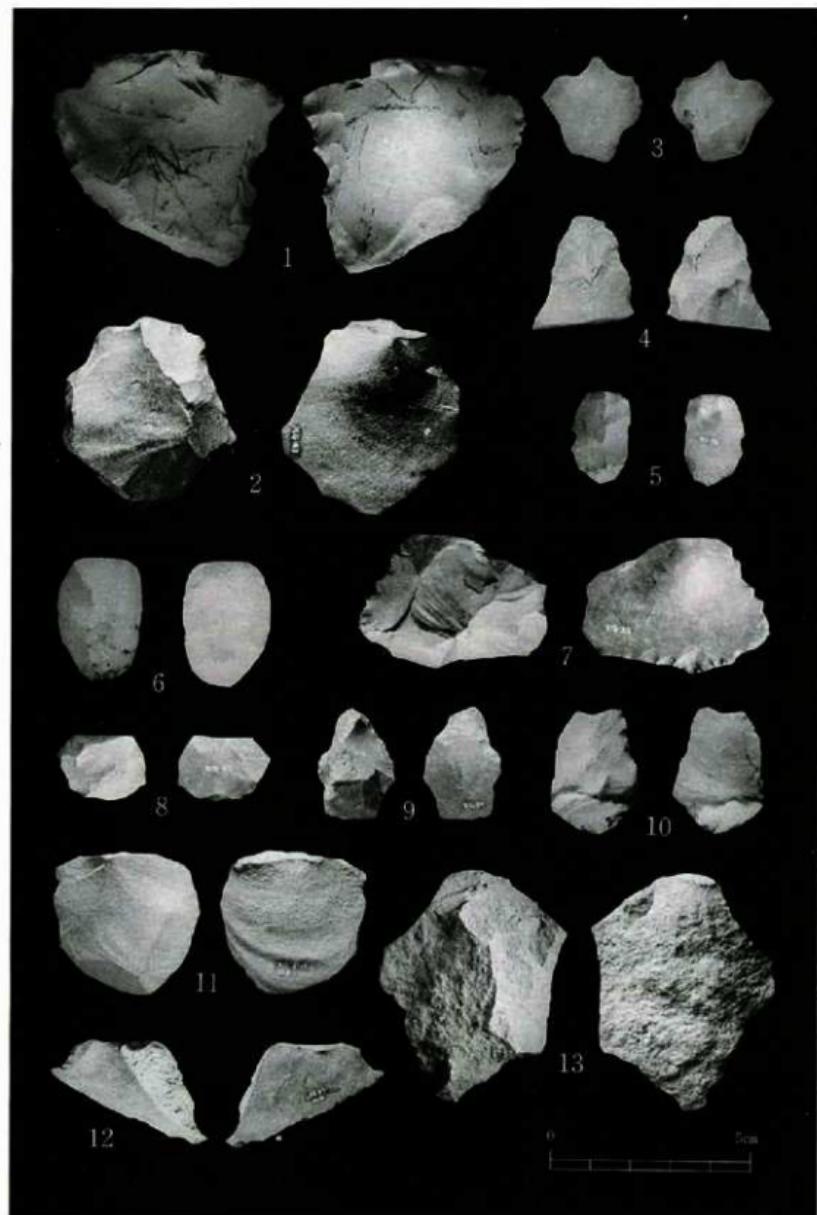




図版10 第1石器集中地点出土石器 (石器番号は第5図と同じ)



図版11 第2・3石器集中地点出土石器（石器番号は第6図と同じ）



図版12 第4・5石器集中地点、その他出土石器（石器番号は第7図と同じ）



A 地図版1 調査区全景（南より）



A 地図版2 調査区全景（西より）



A地区図版3 調査区航空写真（南より）



A地区図版4 1・2・3号製鉄炉全景（南より）



図版5 1号製鉄炉全景（南より）



図版6 1号製鉄炉本体（南より）



図版7 2号製鉄炉本体検出状況（南より）



図版9 1号製鉄炉作業場土層堆積状況（北より）



図版10 3号製鉄炉全景（南より）



図版8 4号製鉄炉（西より）



図版11 3号製鉄炉内送風管検出状況



図版12 3・4・5号木炭窯（西より）



図版16 6号木炭窯（南より）



図版13 5号木炭窯炭化室（南より）



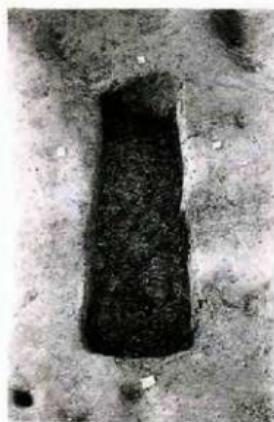
図版17 6号木炭窯炭化材検出状況（南より）



図版14 5号木炭窯煙出し孔（北西より）



図版15 SX 01特殊遺構（南より）



図版18 SX 02特殊遺構（西より）



図版19 調査区平場全景（北より）



図版20 S104竪穴住宅跡（南東より）



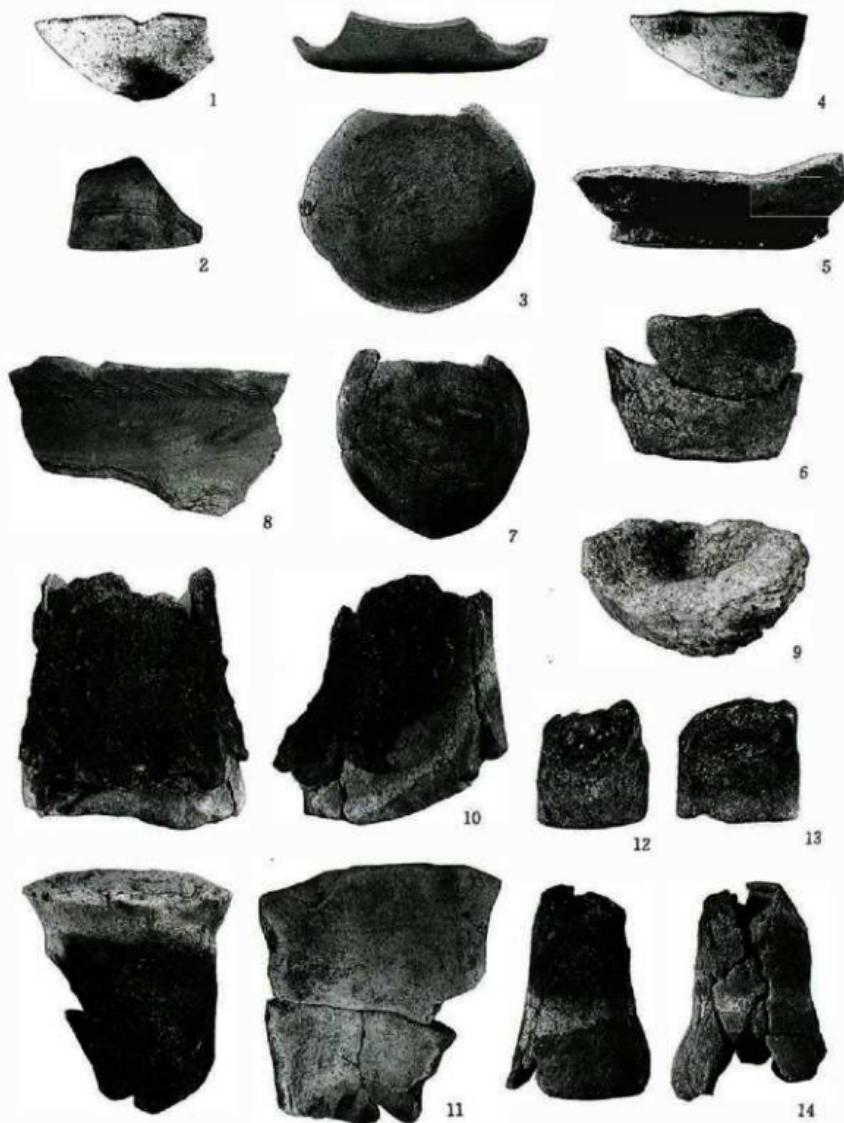
図版22 SK03土塙（西より）



図版21 SK02土塙（北東より）



図版23 SX04特殊遺構・S102竪穴住居跡羽口出土状況



1. 土師器杯 (第24图2)    5. 土師器壁 (第24图6)    9. 楔形泡 (第25图3)    13. 羽口 (第25图7)  
 2. 土師器杯 (第24图1)    6. 土師器壁 (第24图7)    10. 送风管 (第25图1)    14. 羽口 (第25图5)  
 3. 須惠器杯 (第24图3)    7. 土師器壁 (第24图12)    11. 送风管 (第25图2)    12. 羽口 (第25图6)  
 4. 須惠器杯 (第24图5)    8. 須惠器壁 (第24图11)

图版24 出土遗物

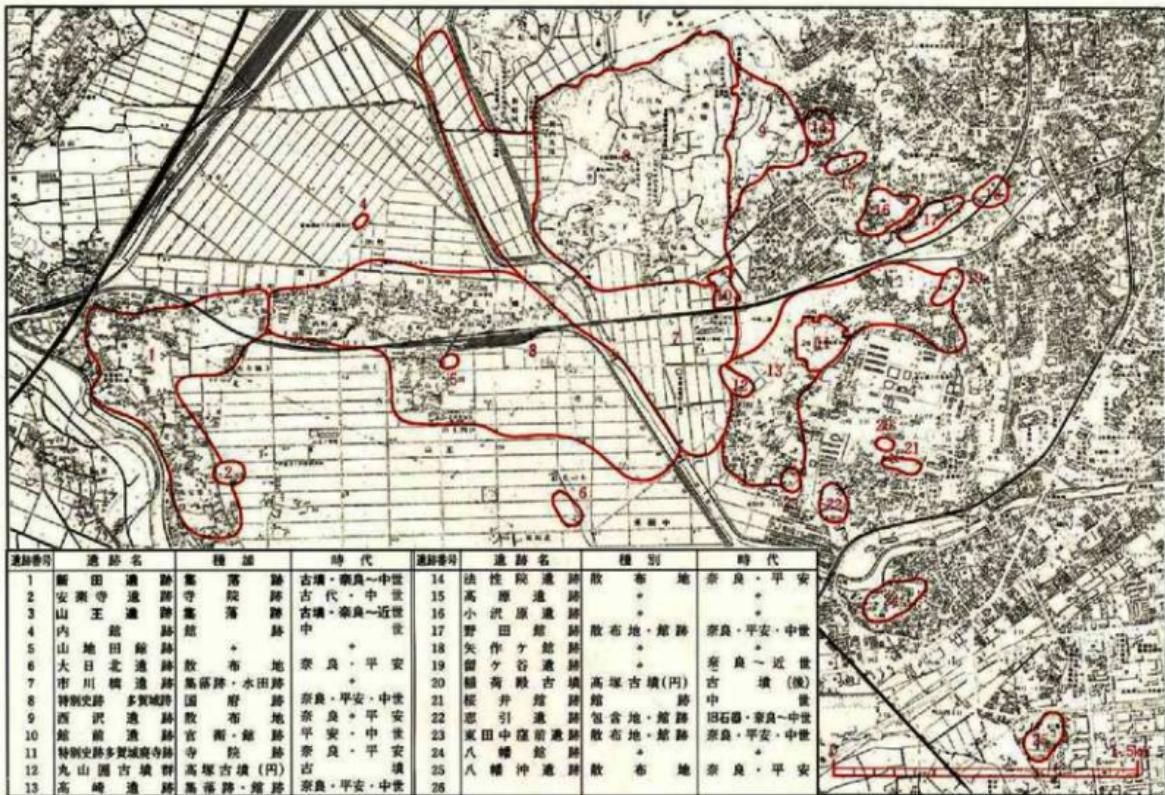


図2 多賀城市遺跡分布図（西部）

## II 新田遺跡(後地区)

### 1. 調査要項

- 所 在 地: 多賀城市新田字後111-1外2筆
- 調査期間: 昭和63年1月25日~2月2日
- 調査面積: 226m<sup>2</sup> (対象面積2,551m<sup>2</sup>)



第1図 調査区位置図

### 2. 遺跡の立地

新田遺跡は、多賀城市的西端部に所在する遺跡である。

多賀城市は、市内をほぼ二分して流れる砂押川によって、東部・北部の丘陵部と、南部・西部に広がる平野部とに大きく区分されている。この平野部は、地理的には広義の仙台平野に含まれられるもので、新田遺跡はその最北端の一隅に位置している。本遺跡は、七北田川によって形成された自然堤防上に立地しており、海拔7~8mを計る。

今回調査を実施した地点は、本遺跡の北西端にあたる後地区の一部で、西方約200mで七北田川に達する。現況では畠地となっており、土器の散布が見られる。

昭和39年7月、今回の調査地点より西方約150mの畠地から多量の土器が出土し、氏家和典

氏によって調査が行われている。遺構に関しては詳細が不明だが、「遺物の包含層は上下二層あり、上層は一五厘米の灰黒色土で、氏家氏綱年の第五型式（栗団式）土師器が検出され、下層は三〇厘米ほどの厚い黒色土で古式の土師器（塙釜式・南小泉式=註筆者）がふくまれていた」という（註1）。また、昭和56年8月には、東方約150mの畠地において、多賀城市教育委員会による新田遺跡第1次調査が行われている。奈良・平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡、中世の掘立柱建物跡・井戸跡などが発見されている（註2）。

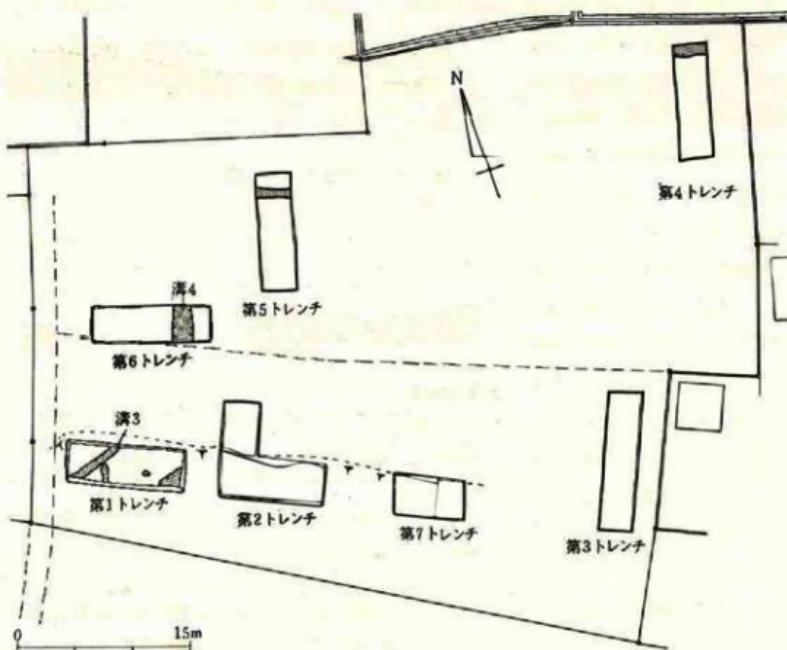
### 3. 調査成果

まず層序についてみると、大部分は表土下に暗褐色の砂質土（第Ⅱ層）があり、その下はすぐ地山である砂層となっている。第Ⅱ層は古代から中世までの遺物を包含するが、近世以降の陶磁器も混在している。地山の砂層としたものは周辺地域一帯の基盤となっているものである。尚、第1トレンチより東側一帯は、現地表より110cmの深さまで攢乱されている。

次に発見した遺構と遺物について簡単に説明を加える。

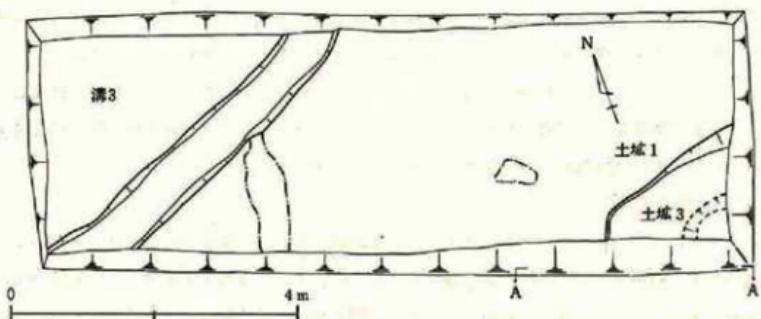
#### (1) 遺構

遺構を発見できたのは第1と第6の2本のトレンチである。



第2区 調査区トレンチ配置図

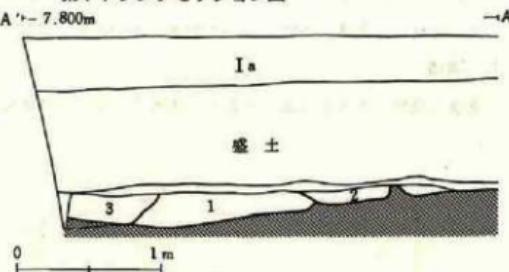
第1トレンチ平面図



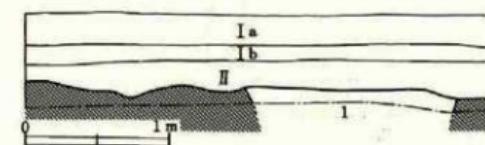
第1トレンチセクション図

【第1トレンチ】 溝跡2条、  
土塁4基を発見した。残存状況  
は良くない。溝3は幅25~65cm  
を計る溝跡で、約5mにわたって  
検出した。壁はわずかに12cm  
を残すのみであり、埋土は灰黃  
褐色の砂質土である。遺物は、  
灰釉を施した中世瀬戸窯の鉢や  
須恵器・赤焼き土器の小片が出  
土している。土塁1~4については  
調査不十分であるが、土塁  
2・4は埋土中に炭化物や焼土  
粒を多く含んでいる状況を確認  
している。遺物は非クロロ調整  
の土師器が出土している。

【第6トレンチ】 溝跡1条を  
発見した。この溝4は平面でブ  
ランを確認しただけであるが幅  
約1.5mを計り南北方向に走って  
いる。埋土は黒褐色の砂質土を  
主体とし、地山の砂をブロック



第6トレンチセクション図  
—7,700m



土層観察表

層位	土色	備考
第1トレンチ		
地盤層 Ia	褐色(10Y R 5%)	表土・耕作土
土塁1 1	にぼい黄褐色(10Y R 5%)	砂質 渡来色土をブロック状に含む
土塁2 2	灰黄色(2.5Y R 5%)	* 焼土や炭化物を多く含む
土塁3 3	浅黄色(5Y R 5%)	* にぼい黄褐色粘土質土を含む
第6トレンチ		
地盤層 Ia	褐色(10Y R 5%)	表土・耕作土
* Ib	+ (10Y R 5%)	*
* II	暗褐色(10Y R 5%)	耕作土 遺物を含む
溝 4 1	墨褐色(20Y R 5%)	砂質 地山ブロックを含む

第3図 第1・6トレンチ実測図

状に含んでいる。また、この遺跡の西側では、地山上で黒色土の堆積がみられる。造構か包含層か判断できなかったが赤焼き土器や土師器の杯が出土している。

## (2) 遺物

土師器、須恵器、赤焼き土器、カワラケ、中世陶器などが平箱で2箱ほど出土している。特に第3トレンチの第Ⅱ層からの出土が多い。土師器は最も多く出土しており、ロクロ調整を行っているものといないものとがあり、後者の中には古墳時代に属するものも多く見られる。

## 4. まとめ

1. 造構としては溝、土塹などを発見した。この内、溝3は中世以降に属すると考えられる。
2. 造構は調査区西半部でのみ検出しているが、第3トレンチにおける土器出土状況をみると、東半部にも造構の存在が予想される。
3. 遺物は古墳時代から中世にかけてのものが出土している。近接する西後地区や第1次調査の成果を考え併せると、各時代の造構が複合していると考えられる。

註1 河部義平「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌』1968

註2 多賀城市教育委員会「年報1」1987

### 〈新田遺跡、山王遺跡 引用・参考文献〉

- 多賀城市史編纂委員会「多賀城」多賀城市史編纂報告書第1集(1980)  
多賀城市教育委員会「山王遺跡」多賀城市文化財調査報告書第9集(1986)  
多賀城市教育委員会「年報1」多賀城市文化財調査報告書第14集(1987)  
白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所(1980)  
仙台市教育委員会「年報1」仙台市文化財調査報告書第23集(1980)  
仙台市教育委員会「年報2」仙台市文化財調査報告書第23集(1981)  
仙台市教育委員会「年報3」仙台市文化財調査報告書第41集(1982)  
福島県教育委員会、財団法人福島県文化センター「母畠地区遺跡分布調査報告11」  
福島県文化財調査報告第173集(1987)

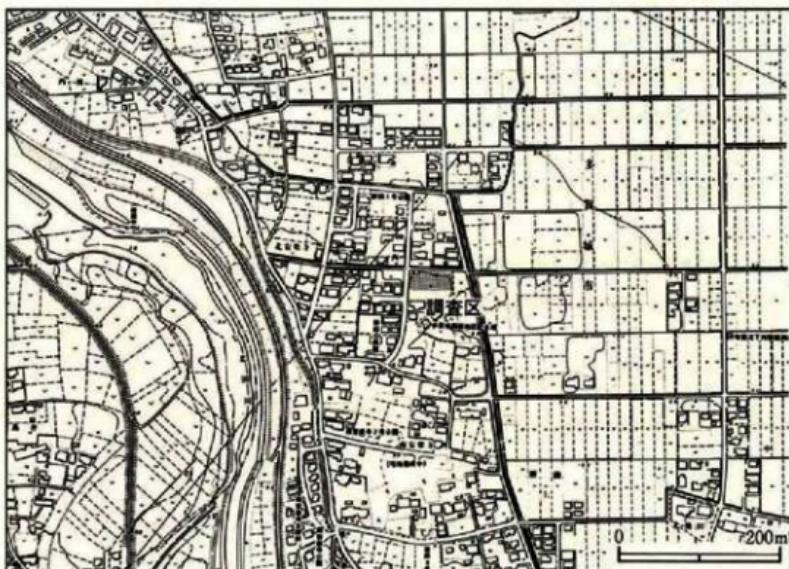
### III 新田遺跡（西地区）

#### 1. 調査要項

○所在 地：多賀城市新田字西39-1、39-2

○調査期間：昭和62年11月12日～19日

○調査面積：約120m<sup>2</sup>（対象面積約1,100m<sup>2</sup>）



第1図 調査区位置図

#### 2. 遺跡の立地

本遺跡は、七北田川東岸の自然堤防上に立地する古墳時代から中世にかけての集落跡である。同様の性格を有する遺跡としては、東側に隣接して山王遺跡があり、また七北田川の対岸には鴻ノ巣遺跡が所在している。

#### 3. 調査経過

本遺跡周辺は、仙台市と境を接する地理的条件のため、近年宅地造成が急増している状況にある。本遺跡の北半部では特にその傾向が著しく、市教育委員会ではこれに対応して昭和56年以降継続的に発掘調査を実施してきている。その結果、中世を中心とする数多くの遺構・遺物が発見され、その内容が次第に明らかになりつつある。これに対して遺跡の南半部では、遺物

の散布はみられるものの、過去3度の試掘調査では遺構は確認されていない。今回の調査区は、遺跡の北端を東西に走る県道泉～塩釜線の南側約600mに位置し、遺構が濃密に分布する地域からやや外れた場所に位置する。

本調査については、昭和62年10月に地権者より宅地造成工事の計画が提示されたため、これについて協議を行い、同年11月に試掘調査を実施するに至ったものである。

調査は、当該地に3×10mのトレンチを南北方向に3本設定して行った。トレンチは西側から順に第1～3の番号をつけ、状況に応じて順次拡張を行った。

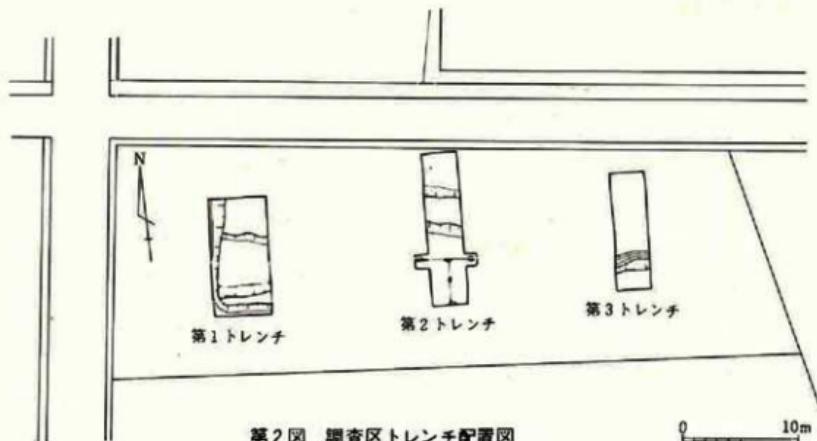
#### 4. 調査成果

調査区内の基本層位は、第Ⅰ層暗褐色シルト（耕作土）、第Ⅱ層黄褐色砂質シルト、第Ⅲ層黄褐色シルトであり、その下層が地山のよい黄褐色砂質シルトとなる。このうち、第Ⅱ層は厚さ10～15cmで、調査区南半部にその分布が限られている。第Ⅲ層は4層に細分でき、厚さ30～40cmで調査区全体に分布している。

検出遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、溝状遺構2条である。

SB01掘立柱建物跡、第2トレンチ第Ⅲ層上面で検出している。後述するSD01溝跡と同一面からの掘り込みである。東西2間、南北2間を確認しただけで全容をつかむまでには至っていない。柱間隔は1.65mから2.3mの範囲で、各柱穴間にばらつきがみられる。柱穴掘り方の大きさも30～60cmと一定ではなく、平面形も不整形である。遺物は出土していない。

SD01溝跡 第1トレンチ第Ⅲ層上面で検出している。大半がトレンチ外にかかるため、全体の規模、形態などは不明である。トレンチ南西部で「L」字状に屈曲しており、さらに北側と東側に延びると思われるが、他のトレンチでは確認されていない。遺物は近代以降のものと



第2図 調査区トレンチ配置図

0 10m

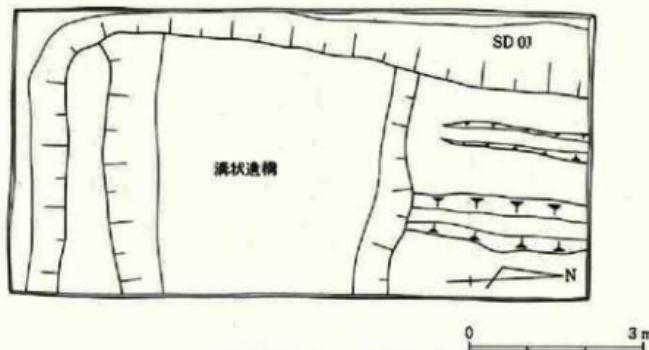
みられる陶磁器が出土している。

溝状造構 すべてのトレンチの地山上で検出した東西方向に延びる造構である。第2トレンチでは、約2.2mの間隔で南北2箇所で検出した。このうち北側の造構については、その延びは不明であるが、南側の造構は、第1・3トレンチ検出のものと一続きになると思われる。幅は第1トレンチで約5m、第3トレンチでは8m以上を計るなど一定しておらず、かなり出入りの激しい平面形をもつと思われる。深さは15~30cmで、幅に比較すると非常に浅く、底面は中央付近でやや深さを増すもののほぼ平坦面を呈する。なお、第3トレンチの南壁際では壁に沿って幅70~90cmの小溝状のくぼみが走っているが、他のトレンチではこの延長は確認されていない。埋土は黒褐色シルト及びそれに近い黄灰色シルトからなり、酸化鉄斑や植物遺体などは含まない。また堆積のあり方から自然埋没と考えられる。遺物は、土師器、須恵器杯、甕、赤焼き土器がわずかに出土している。

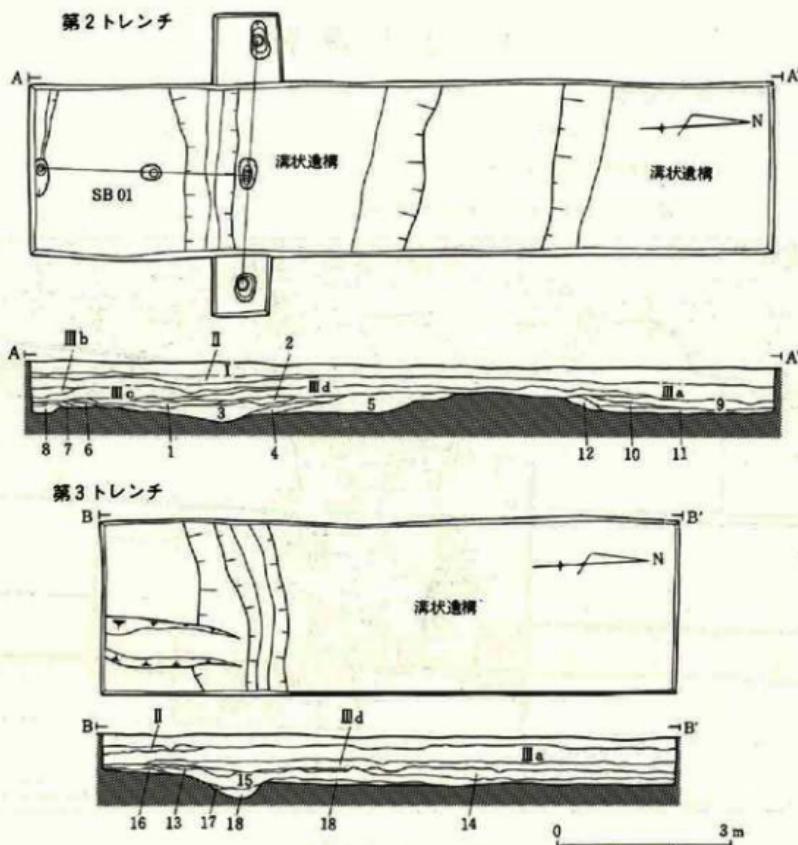
出土遺物については、前述したように造構に伴なう遺物は僅少で、器形の特徴や年代がわかるものはほとんどない。堆積土出土の遺物も、第Ⅲ層中から土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器が出土しているが、いずれも小破片で図示できるものはない。

## 5.まとめ

今回の調査における検出造構のうち、SD01溝跡は出土遺物から近代以降のものと考えられる。また、SB01建物跡については、これに伴なう遺物がないことから年代を明確にすることはできない。しかし、SD01溝跡と同じ面の確認であることや、掘り込み面である第Ⅲ層中から中世陶器が出土していることもあり、大きく近世以降のものと考えておきたい。なお、溝状造構の性格及び年代については、今回の調査範囲だけでは言及することはむずかしく、不明と言わざるを得ない。



第3図 第1トレンチ平面図



土層観察表

層位	土 色	備 考	層位	土 色	備 考
基本層位					
I	暗褐色(10Y R 5%)	砂質土	6	にじい黄褐色(10Y R 5%)	砂質
II	黄褐色(2.5Y %)	砂質	7	黄褐色(2.5Y %)	*
IIa	ε (2.5Y %)	黄褐色砂質土を斑状に含む	8	暗灰黄色(2.5Y %)	黄褐色砂質土を斑状に若干含む
IIb	ε (2.5Y %)	砂質	9	黄褐色(2.5Y %)	*
IIc	オリーブ褐色(2.5Y %)	砂質	10	暗灰黄色(2.5Y %)	*
IID	暗灰黄褐色(2.5Y %)	黄褐色砂質土を混入	11	暗褐色(2.5Y %)	*
溝状造構埋土					
1	暗オリーブ褐色(2.5Y %)	砂質 嵌オリーブ褐色土を混入	12	暗灰黄色(2.5Y %)	*
2	にじい黄色(2.5Y %)	黄褐色砂質土を斑状に含む	13	黄褐色(2.5Y %)	砂質
3	黄褐色(2.5Y %)	砂質	14	暗灰黄色(2.5Y %)	粘性あり
4	にじい黄色(10Y R 5%)	にじい黄褐色砂質土を斑状に含む	15	黒褐色(2.5Y %)	*
5	黒褐色(2.5Y %)	にじい黄褐色砂質土を斑状に含む	16	オリーブ褐色(2.5Y %)	砂質 嵌灰黄色土を混入
			17	にじい黄色(10Y R 5%)	やや砂質
			18	灰黄褐色(10Y R 5%)	

第4図 第2・3トレンチ実測図

## IV 山王遺跡

### 1. 調査要項

○所在 地：多賀城市山王字山王二区179、179-1、180-1、181-1

○調査期間：昭和62年12月7日～15日

○調査面積：約440m<sup>2</sup>（対象面積1,900m<sup>2</sup>）



第1図 調査区位置図

### 2. 遺跡の立地

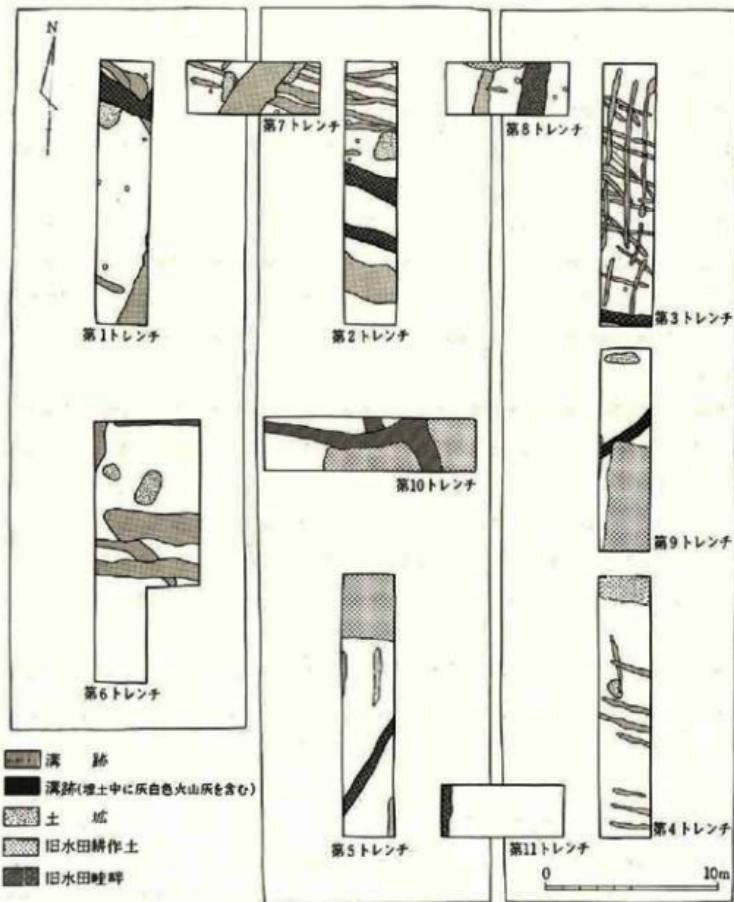
本遺跡は、古墳時代から近世にかけての大規模な集落跡であり、旧七北田川と砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。今回の調査区は遺跡のほぼ南端にあたり、JR東北本線陸前山王駅の南西約600mに位置する。現況は標高約4.4mの水田である。

### 3. 調査経過

本調査については、昭和62年9月に地権者より宅地造成工事の計画が提示されたため、それを受けて同年12月に試掘調査を実施したものである。過去の調査では、当該地の北東側と東側の隣接地において昭和55年と60年に発掘調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡や中世後半から近世初頭にかけての掘立柱建物跡、溝跡、土塙などが検出されてい

る。したがって、当該地についても造構が存在する可能性が十分考えられた。

調査は、はじめに  $3 \times 15\text{m}$  の 6 本のトレーンチを南北方向に設定して行った。その結果、表土下20~30cmの地山上で溝跡などの造構を確認した。その後、造構の伸び方や分布状況をつかむため、新たに任意の大きさで 5 本のトレーンチを設定して調査を継続した。



第2図 調査区平面図

#### 4. 調査成果

調査区内の基本層位は、第Ⅰ層暗灰黄色シルト（耕作土）、第Ⅱ層黄灰色粘土質シルトである。後世の削平が著しく、調査区の大部分で地表面に直接第Ⅰ層がのっている。第Ⅱ層は耕地整理前の水田の耕作土で、調査区中央付近にその分布が限られる。

発見された遺構は、溝跡11条、土塙8基、小溝跡、小柱穴跡のほか、耕地整理前の水田跡とそれに伴なう畦畔跡である。遺構は調査区のほぼ全域で確認されたが、比較的北半部に集中する傾向にある。すべて地山上での検出である。

まず溝跡について触ると、調査区北西部に位置する第1・6・7トレーニチにおいて検出した南北方向に延びる溝跡は、一続きになるものと思われる。幅約1.2mを計り、北側で小溝跡や土塙を切っている。埋土は、上層の耕作土に類似した灰色粘土質シルトである。他の溝跡については、埋土が褐色シルトのものと、黒褐色シルトのものとに分けられる。前者は、おもに調査区北半部で検出され、埋土中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が含まれている。また、方向は一概にはいえないが、磁北に対して全体的に東側に偏する傾向にある。

土塙については、埋土が黒褐色シルトのものと、黒褐色シルトが混入したにぶい黄褐色シルトのものとに分けられる。大きさ、形態とも一様ではないが、平面形は梢円形を呈するものが比較的多い。

小溝跡は、調査区北東部と南東部にまとまりがみられるが、前者の方が圧倒的に分布密度が濃い。幅は全体的に20~30cmとほぼ一定している。深さは非常に浅く、同一溝跡でも削平のため途切れる場合が多く、まとまりや重複関係がつかみづらい状況にある。埋土は、すべて地山に類似したにぶい黄褐色シルトである。また、方向にある程度規則性がみられ、磁北の南北軸にはほぼ一致するものと、東西軸に対して東側でやや南に偏するものの2つに大別できる。前者については、第3トレーニチで多くみられる程度であるが、重複関係から後者より新しいことがわかる。

遺物は、遺構の掘り込みを全く行っていないため、すべて堆積土出土のものである。第Ⅰ層第Ⅱ層とも土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器に、近世以降のものと思われる陶磁器や瓦が混入している。また、小破片が多く図示できるものはない。

#### 5.まとめ

今回の調査における発見遺構の構成は、溝跡、土塙が主体を占める。これらの遺構は、埋土中に灰白色火山灰を含むものが多いことなどから、平安時代を中心とするものと思われる。また、昭和60年に発掘調査を実施した東側隣接地においては、平安時代の遺構のほかに中世後半から近世初頭にかけての遺構が数多く発見されていることから、本調査区にも同様の遺構の広がりがみられる可能性が強い。

## 写 真 図 版

新田遺跡（後地区） .....	68・69
新田遺跡（西地区） .....	70・71
山王遺跡 .....	72～74

新田遺跡（後地区）



図版1 調査区全景



図版2 第1トレンチ遺構検出状況



図版3 溝3（第1トレンチ）

図版4 土塙1  
(第1トレンチ)



図版5 土塙2 埋土断面  
(第1トレンチ)



図版6 溝4 埋土断面  
(第6トレンチ)



新田遺跡(西地区)



図版1  
調査区全景  
(東側より)



図版2  
第1トレンチ  
(北側より)



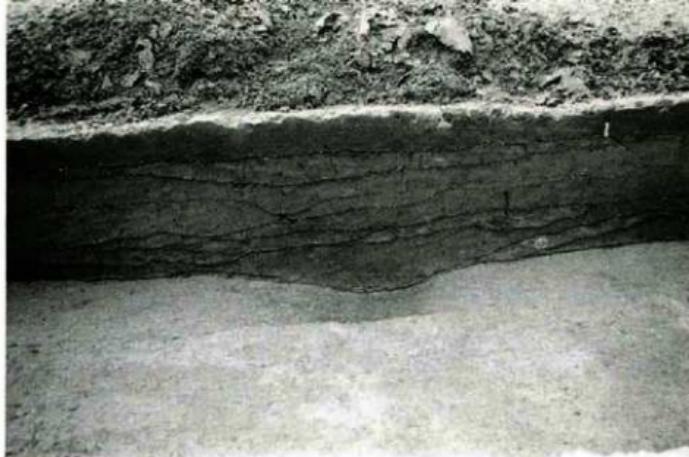
図版3  
第2トレンチ  
(南側より)

図版4

第2トレンチ

土層堆積状況

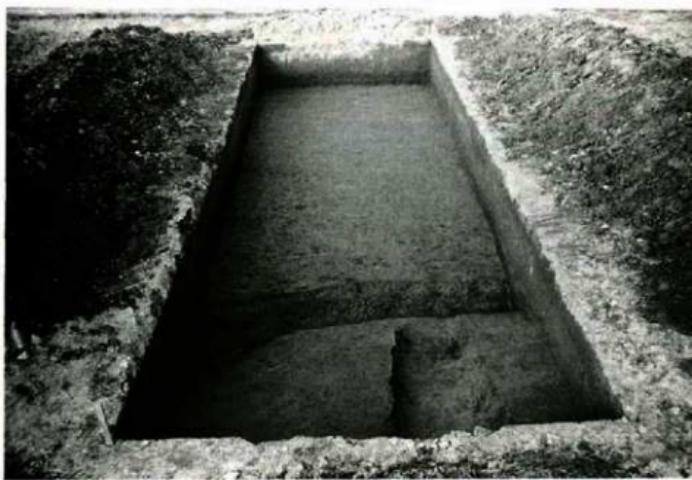
(東側より)



図版5

第3トレンチ

(南側より)



図版6

第3トレンチ

土層堆積状況

(東側より)



## 山王遺跡



図版1  
調査区全景  
(西側より)



図版2  
掘り込み状況  
(南東側より)



図版3  
掘り込み状況  
(北西側より)

図版4

第2トレンチ  
(南側より)



図版5

第6トレンチ  
(東側より)



図版6

第7トレンチ  
(東側より)





図版7 第1トレンチ（北側より）



図版8 第3トレンチ（北側より）



図版9 第4トレンチ（南側より）



図版10 第5トレンチ（南側より）



図版11 第8トレンチ（東側より）



図版12 第9トレンチ（南側より）



図版13 第10トレンチ（西側より）



図版14 第11トレンチ（西側より）

## 多賀城市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 築前遺跡—昭和54年度発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第2集 山王・高崎遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
第3集 高崎・市川橋遺跡調査報告書—昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）  
第4集 市川橋遺跡調査報告書—昭和57年発掘調査報告書（昭和58年3月）  
第5集 市川橋遺跡調査報告書—昭和58年発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第6集 志引遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第7集 大代横穴古墳群発掘調査報告書（昭和60年3月）  
第8集 市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書（昭和60年3月）  
第9集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書I（昭和61年3月）  
第10集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書II（昭和61年3月）  
第11集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1単建設工事関連発掘調査報告書I（昭和61年3月）  
第12集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1単建設工事関連発掘調査報告書II（昭和62年3月）  
第13集 市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書（昭和62年3月）  
第14集 年報1（昭和62年3月）  
第15集 昭和62年度発掘調査報告書（昭和63年3月）  
第16集 年報2（昭和63年3月）

---

多賀城市文化財調査報告書第15集

### 昭和62年度発掘調査報告書

昭和63年3月31日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
発行 多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022) 368-0131~4  
印刷 渡辺印刷  
塙釜市旭町17番13号  
電話 (022) 364-3161

---